245

熊山遺跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

1974年3月

熊山町教育委員会

熊山遺跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

1974年3月

熊山町教育委員会

史跡「熊山遺跡」　石積遺構

序

本町の南東，標高508mの熊山は，古来より神聖な山として崇められてきました。

この熊山山上にある「熊山遺跡」は，国の史跡に指定され17年余になりますが，最近いちだんと石積西面の崩壊がすすみ歪みを生じてきたので，石積復旧修理の要望が強まってきました。

また，「熊山遺跡」は特殊な三段方形の石積を中心とする史跡ですが，その石積の性質も明らかでなく，謎の石積とされてきました。

このたび，文化庁の指示により，国・県の補助金を得て，石積復旧修理を前提とした緊急発掘調査の実施が決定され，ここに地主および地元民の方々の理解と協力により，一連の調査が実施されたことは，まことに意義深く喜びに堪えないところであります。

このたびの調査によって，熊山連山に分布する石積遺構の状況が明らかになるとともに国指定石積の解明の手がかりの一端がつかめ、今後の研究資料として活用されるよう期待するところが大であります。

ここにようやく調査の報告書がまとまり，調査の概要を公にすることになりましたが，直接指導助言をいただいた奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部，坪井部長・牛川技官，岡大近藤教授をはじめ専門研究者各位ならびに調査実施に格別のご理解とご尽力をたまわった地元各位に対し，感謝の念を捧げ序文とします。

1974年3月

熊山町長　實盛　勇

例　　言

1. 本書は，文化庁の指示により，熊山町教育委員会の組織した，史跡「熊山遺跡」緊急発掘調査委員会が，1973年（昭和48年）9月から1974年（昭和49年）1月にかけて実施した岡山県赤磐郡熊山町に所在する「熊山遺跡」に関する調査報告書である。
2. 国指定石積の写真実測は奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部，計測修景調査室が担当し，図化は奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部の指導のもとに，アジア航測株式会社が行なった。
3. 石積遺構の分布調査に際しては，備前市，瀬戸町，和気町の地元各位の協力を得た。
4. この報告書の執筆および編集は，坪井清足，牛川喜幸，角田茂，難波俊成，正岡睦夫，真野義一が担当した。
5. 出土遺物の整理・実測・浄書ならびに分布調査における各石積の略図は，角田茂，正岡睦夫が担当した。
6. 写真の撮影および編集は，角田茂，正岡睦夫，真野義一が担当した。
7. 本書に掲載してある関連石積の図は，正確な実測によるものでなく見取りの略図である。

熊　山　遺　跡

岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報

目　　次

頁

第一章　調査の経過……1
　Ⅰ　はじめに……1
　Ⅱ　調査目標……3
　Ⅲ　経　　過……3

第二章　熊山の地理的景観……9

第三章　国指定石積の写真測量……11
　Ⅰ　調査目的および期間……11
　Ⅱ　実測調査方法……11
　Ⅲ　成　　果……16

第四章　トレンチ調査……18
　Ⅰ　Aトレンチについて……18
　Ⅱ　Bトレンチについて……18
　Ⅲ　遺　　物……19
　Ⅳ　「鐘楼跡」について……24
　Ⅴ　墳状遺構について……25

第五章　石積遺構分布調査……26
　Ⅰ　はじめに……26
　Ⅱ　各遺構の概要……27
　Ⅲ　調査を終えて……38

第六章　ま　と　め……44
　Ⅰ　石積遺構の実測……44
　Ⅱ　石積遺構東側の発掘調査……45
　Ⅲ　分布調査……45

付　参考文献目録……47

図 版 目 次

グラビア　「熊山遺跡」石積遺構　南東から

図版第1，(1)熊山遺跡，石積遺構　東から（真野撮影）
(2)熊山遺跡，石積遺構　南から（真野撮影）

図版第2，(1)国指定石積遺構，龕　東から（真野撮影）
(2)国指定石積遺構，龕　南から（真野撮影）

図版第3，(1)国指定石積遺構，龕　西から（真野撮影）
(2)国指定石積遺構，龕　北から（真野撮影）

図版第4，(1)国指定石積遺構出土，陶製筒形容器（近江撮影）
(2)陶製筒形容器，蓋（部分）（近江撮影）

図版第5，(1)熊山遠景（真野撮影）
(2)熊山遺跡からの遠望（南）（真野撮影）

図版第6，(1)「鐘楼跡」石列北から（真野撮影）
(2)発掘区全景北から（真野撮影）

図版第7，(1)Aトレンチ W－2区平瓦出土状況（真野撮影）
(2)史跡内墳状遺構東から（真野撮影）

図版第8，出土瓦　（正岡撮影）

図版第9，(1)竜神山1号（行者様）石積遺構（B_1）南から（角田撮影）
(2)南山崖1号石積遺構（C_1）南から（角田撮影）

図版第10，(1)南山崖2号石積遺構（C_2）南から（角田撮影）
(2)南山崖3号石積遺構（C_3）西から（真野撮影）

図版第11，(1)南山崖3号石積遺構（C_3）北東から（真野撮影）
(2)南山崖3号石積遺構 龕 東から（真野撮影）

図版第12，(1)南山崖4号石積遺構（C_4）南東から（真野撮影）
(2)南山崖5号石積遺構（C_5）東から（真野撮影）

図版第13，(1)経盛山1号石積遺構（D_1）北東から（真野撮影）
(2)風神山1号石積遺構（E_1）南から（真野撮影）

図版第14，(1)風神山2号石積遺構（E_2）東から（角田撮影）
(2)風神山3号（鍛冶神様）石積遺構（E_3）南東から（角田撮影）

図版第15，(1)南の峰1号石積遺構（F_1）南東から（真野撮影）
(2)南の峰2号石積遺構（F_2）西から（真野撮影）

図版第16，(1)南の峰3号石積遺構（F_3）南から（真野撮影）
(2)南の峰4号石積遺構（F_4）南から（真野撮影）

図版第17，(1)南の峰5号石積遺構（F_5）南西から（真野撮影）
(2)南の峰7号（美音院跡）石積遺構（F_7）東から（真野撮影）

図版第18，(1)南の峰8号石積遺構（F_8）南から（真野撮影）
(2)大谷山1号石積遺構（G_1）東から（真野撮影）

図版第19，(1)高津山南1号石積遺構（H_1）北西から（真野撮影）
(2)山頂三角点1号石積遺構（I_1）南から（角田撮影）

図版第20，(1)尺八山1号（院の墓）石積遺構（J_1）東から（真野撮影）
(2)獅子が谷1号石積遺構（K_1）西から（狐塚撮影）

図版第21，(1)獅子が谷2号石積遺構（K_2）西から（狐塚撮影）
(2)舟下山1号（犬の墓）石積遺構（L_1）東から（中力撮影）

図版第22，(1)烏帽子岩1号石積遺構（M_1）南から（今田撮影）
(2)千躰行人山石積遺構（O_1）東から（真野撮影）

図版第23，　(1)千躰明人山石積遺構（O_2）南から（真野撮影）
　　(2)坂根竜神様石積遺構（O_3）東から（真野撮影）
図版第24，　(1)香登宮山石積遺構（O_4）南から（真野撮影）
　　(2)勢力雲上山石積遺構（参考地No.38）東から（禾撮影）
図版第25，　(1)珠千壇地区石積遺構（参考）

挿　図　目　次

			頁
第 1 図	写真測量の原理……	（平城宮跡発掘調査部，　作成）	11
第 2 図	①写真測量用カメラSMK40…	（平城宮跡発掘調査部，　撮影）	12
	②図化機ステレオメトログラフ	（平城宮跡発掘調査部，　撮影）	12
第 3 図	基準点および撮影点配置図……	（平城宮跡発掘調査部，　作成）	13
第 4 図	撮影作業……	（平城宮跡発掘調査部，　撮影）	14
第 5 図	対写真……	（平城宮跡発掘調査部，　撮影）	14
第 6 図	石積遺構周辺地形図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	15
第 7 図	石積遺構平面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 1
第 8 図	石積遺構東立面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 2
第 9 図	石積遺構西立面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 3
第 10 図	石積遺構北立面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 4
第 11 図	石積遺構南立面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 5
第 12 図	石積遺構断面図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	挿頁 6
第 13 図	石積遺構模式図……	（平城宮跡発掘調査部，実測，作成）	17
第 14 図	Aトレンチ土層断面図（正岡・真野実測，正岡製図）……		挿頁 7
第 15 図	Bトレンチ土層断面図（正岡・真野実測，正岡製図）……		挿頁 8
第 16 図	熊山遺跡出土遺物実測図（正岡，実測・製図）……		20
第 17 図	熊山遺跡出土瓦実測図（正岡，実測・製図）……		22
第 18 図	W－2区出土瓦実測図（正岡，実測・製図）……		23
第 19 図	鉄釘実測図（正岡，実測・製図）……		24
第 20 図	墳状遺構実測図（正岡・角田・楢原・本原実測，正岡・本原製図）		25
第 21 図	南山崖6号（C_6）出土土師器実測図（正岡，実測・製図）……		29
第 22 図	尺八山1号（J_1）出土遺物実測図（正岡，実測・製図）……		34
第 23 図	K地区寺院跡出土瓦実測図（正岡，実測・製図）……		35
第 24 図	千躰明人山（O_2）出土備前焼実測図（正岡，実測・製図）……		37
第 25 図	大廻山地区石積分布地……		42
第 26 図	各石積遺構略図（角田，作成）……		挿頁 9
第 27 図	熊山の地形および石積遺構分布図（角田・真野，作成）……		挿頁10

付 表 目 次

頁

付 表 1 石積遺構分布状況…… 38

付 表 2 熊山山塊石積遺構群一覧表…… 40

第一章　調査の経過

Ⅰ　はじめに

岡山県赤磐郡熊山町の南東，標高 500mの熊山山上に残る『熊山遺跡』は，昭和31年９月27日国の指定を受けた，三段の方形石積遺構を中心とする史跡である。

しかし，盗掘のため破壊された石積遺構の西側一面の崩壊が進行し，石積遺構全体としても歪みが生じ，全面にわたって崩壊するおそれがあるため，管理者である熊山町は，所有者熊山神社総代会と相談し，石積遺構復旧修理の申請をつづけてきた。

昭和47年度において，国費30万円，県費10万円の補助を受け，総額60万円で案内板の作成，注意札，囲柵等の環境整備を実施した。

ひきつづき，昭和48年度においては，石積復旧修理を前提とした緊急発掘調査を実施するようにとの文化庁の指示により，国からの補助金 225万円，県からの補助金75万円，総額 450万円をもって，調査を実施することになった。

昭和48年９月13日，熊山町舎において「史跡熊山遺跡緊急発掘調査委員会」が組織され，第一回の会合が開かれた。

熊山町教委から，石積復旧修理を前提とした調査方針がだされ，協議の結果，

1．国指定史跡内の石積遺構写真測量および図化

2．史跡内のトレンチ調査

3．史跡「熊山遺跡」に開連する石積遺構分布調査

を目的とした調査を実施することに，意見の一致をみた。

調査は1973年（昭和48年）９月17日から約４ヵ月の予定で行なわれた。

「史跡熊山遺跡緊急発掘調査委員会」の編成はつぎのとおりである。

委員長	實盛　勇	（熊山町長）
副委員長 兼専門委員	近藤　義郎	（岡山大学法文学部教授）
副委員長	吉原　貞郎	（熊山町教育委員会教育長）
副委員長	岡田　政敏	（岡山県教育次長，文化課長）
専門委員	坪井　清足	（奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部長）
	牛川　喜幸	（奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部）

伊東　太作　（奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部）

田中　哲雄　（奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部）

佃　　幹雄　（奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部）

角田　　茂　（赤磐郡瀬戸中学校教諭）

難波　俊成　（近畿大学講師）

吉房　信夫　（熊山町文化財専門委員長）

委　員　水川冨貴男　（岡山県教育庁文化課課長補佐）

浅原　　健　（岡山県教育庁文化課文化財主幹）

中力　　昭　（岡山県教育庁文化課文化財保護主事）

正岡　睦夫　（岡山県教育庁文化課文化財保護主事）

大橋　義則　（岡山県教育庁文化課主事）

小原　　孝　（岡山県教育庁文化課主事）

大橋　一男　（熊山町助役）

藤本　　力　（熊山神社代表総代）

入矢渡士吾　（熊山町文化財専門委員）

岡崎　埝太　（熊山町文化財専門委員）

森定　憲太　（熊山町文化財専門委員）

藤森　晴人　（熊山町文化財専門委員）

監　事　土井　易雄　（熊山町文化財専門委員）

野波　能一　（熊山町役場総務課長）

幹　事　真野　義一　（熊山町教育委員会社会教育主事）

会　計　西沢　幸男　（熊山町収入役）

国平　頼好　（熊山町教育委員会学事係長）

調査にあたり，奈良国立文化財研究所の特別のご配慮により，調査委員会に参加していただいた，平城宮跡発掘調査部部長坪井清足氏をはじめ，牛川喜幸氏を中心とする写真実測班の諸先生に感謝の意をささげたい。また，三輪嘉六（文化庁技官），田中　琢（文化庁技官）両氏の現地来訪を得，多大のご指導と助力をえた。さらに大場磐雄氏（国学院大学客員教授），近江昌司氏（天理大学附属参考館）その他諸氏の視察と助言を得た。

なお，石積遺構分布調査期間中には，岡山大学考古学教室の学生諸氏および和気閑谷高校，備前高校の生徒諸君の助力をえた。

また，遺跡所有者熊山神社総代会，奥吉原区長川辺豊一氏，熊山神社社務所潮見ご夫妻，梶田宝氏ら地元

の方々，楠原清馬氏，石原秀一氏，今田利輔氏ら東備史談会の諸氏をはじめ，献身的に分布調査に助力をいただいた方々，とりわけ入山について理解と協力を示された地権者ならびに岡山営林署など諸氏に深い感謝をささげるしだいである。

Ⅱ 調 査 目 標

このたびの調査は，崩壊しかかっている石積遺構を復旧修理するための資料収集を主目標とするものである。しかしながら史跡が廃寺帝釈山霊山寺の境内に位置するため，「鐘楼跡」，「観音堂跡」と伝承されている地域が含まれている。そのために具体的目標として，

(1) 写真測量および図化

石積遺構復旧修理のために正確な実測図を作成する必要から，石積遺構各面の縮尺1/20の立面図ならびに平面図を作成する。

(2) トレンチ調査

石積遺構築成時の手がかりを調査するとともに，霊山寺跡の遺構の広がりを確認し，今後の環境整備の参考に資するために，「鐘楼跡」を中心に，東西18m，南北18.5mに幅1mのトレンチ各1本を掘削する。

(3) 熊山全山にわたる石積遺構分布調査

国指定石積遺構と類似する大小の石積遺構が，熊山連山に3～30数基あると言われているが，その分布状況，規模等については綿密な調査がなされてなく不明であった。それ故に，国指定石積遺構を中心として，東西約7km，南北約6.5kmにわたってその分布状況を調査し，その数，規模等を確認するとともに，国指定石積遺構との関連を調査する。

Ⅲ 経 過

調査日程を立案するにあたり，石積遺構分布調査は，松茸山の関係から，入山許可のでる11月から約2か月間の予定で調査することにし，それに先だって，写真測量作業，トレンチ調査を実施する計画とした。

1. 調 査 準 備

昭和48年9月17日

器材運搬。器材保管場所として熊山神社社務所を借用。写真測量，トレンチ調査のための除草作業開始。史跡の境界線の伐採。

9月19日～21日

石積遺構周辺を中心とした除草作業。石積遺構の南側に長さ約30mの石垣があらわれる。

9月22日

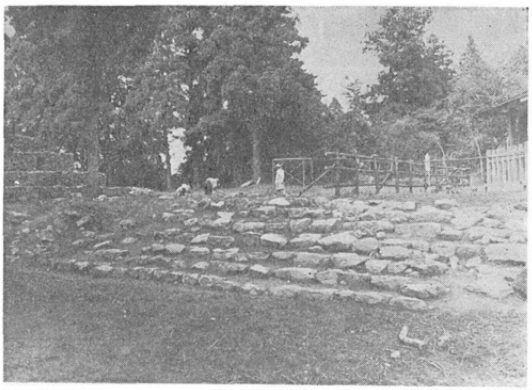
写真測量のための木材，パイプヤグラ等の運搬。

9月25日～27日

石積遺構周辺の除草作業にひきつづき落葉，腐植土の除去作業を続行。石積遺構の西方に岩盤が露出していたが，腐植土の除去により，各方位に岩盤露出。大岩盤の上に石積が築造されていることが判明。形も一段と大規模に見える。

9月28日～29日

「鐘楼跡」の南の段。一段と低位になっている場所の清掃。「鐘 楼 跡」へ通ずる幅10m，7段の石段が，清掃によって現われる。



〈写真①〉　清掃作業によって表われた石段

2. 写 真 測 量

10月1日

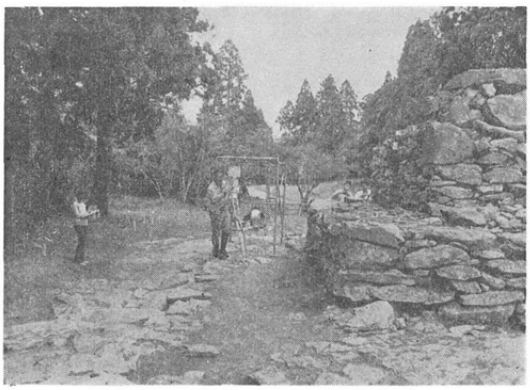
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部牛川喜幸氏ら4名来町。熊山町舎にて写真測量日程の細部について打合せ。

10月2日

写真測量の器材運搬。撮影のための原点設定。基準杭（No.1・No.2）の埋設作業およびポイント設定作業。

10月3日

原点（No.1杭）の海抜高度測定。No.1杭＝海抜 437.274m。石積遺構南側石垣推積土の除去作業。



〈写真②〉　国指定石積　写真測量作業

10月4日

基準杭，No.3，No.4の埋設作業。各ポイント間の距離測定。

10月5日

石積遺構周辺の平板測量作業。

10月6日～9日

写真測量作業，石積の各面の撮影，ひきつづいて南側石垣および階段の撮影。

10月10日

パイプヤグラ，木材等の器材撤去作業。

3. トレンチ調査

10月11日

熊山遺跡発掘調査専門委員会。

現地熊山山上において，雨の中でトレンチ調査の方法，範囲について検討会。

10月13日

トレンチ調査の原点を，写真測量№1杭を使用し，「鐘楼跡」でクロスするようにトレンチ設定。

10月15日

石積遺構の東側広場の調査の実施。「鐘楼跡」の部分の除草。完全に清掃したのち写真撮影。13日ひきつづき，トレンチ調査のための割りつけ。

10月16日

トレンチ調査

E－3，4区，W－1，2区　N－1，2，3区，　S－1，2，3区掘下げ作業，表土下のやや明るい黄褐色土層には少量の瓦と土器片が全域に含まれている。S－3区下層の灰色土で，土師器片を比較的多く含んでいる。また，同層から縄目の平瓦片を検出した。

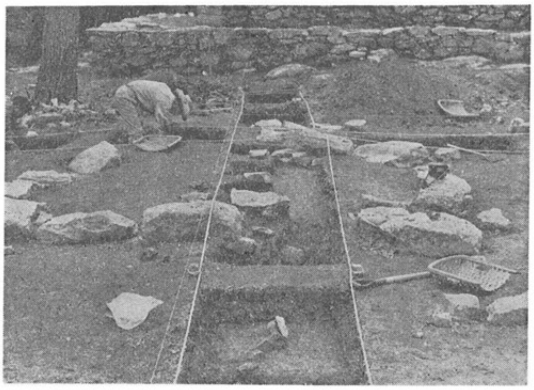
10月19日

トレンチ調査継続

各トレンチの残りの部分を下層まで掘り下げる。W－1，2区下層に瓦を多量に出土した。

10月20日

除草作業によって確認された墳状遺構の平板実測。トレンチの清掃と写真撮影。トレンチ断面の撮影準備，水糸の設置と土層区分を行なう。



〈写真③〉　トレンチ調査作業

10月22日

トレンチ断面の清掃と写真撮影および断面実測調査の実施。E－2，3区で一部を掘り下げる。

10月23日

天理大学附属参考館，近江昌司氏視察。

10月26日

文化庁技官三輪嘉六氏，国学院大学客員教授大場磐雄氏岡山大学名誉教授，藤井駿氏ら視察。

11月2日

熊山遺跡発掘調査専門委員会（トレンチ調査について現地検討会）

トレンチ調査の一部補足調査の実施。瓦のとりあげ作業。ひきつづいて，東西トレンチの北壁の実測を一部補足する。

4.　石積遺構分布調査

11月４日～７日

岡山県赤磐郡瀬戸町弓削地区内における石積遺構分布調査。

南山崖を中心として，遺構が密集しており，国指定の石積と同規模の遺構が確認される。石積遺構周辺に落葉及び雑木が生え茂り，清掃に時間を要する。

※11月９日

分布調査のために山上に登るも，小雨となり調査不能。作業を変更しW区およびＳ区のトレンチ埋めもどし。

11月10日～11日

瀬戸町弓削地区の経盛山を中心として，石積遺構分布調査。

※11月12日～14日

トレンチ埋めもどし作業（Ｎ区およびＥ区）。史跡地内石段西側の崩れた個所の清掃および囲柵の補修。パイプヤグラ，角材，テントの返却ならびにトレンチ調査地域のあと片付け。

※11月17日

史跡地内全域にわたって平板測量。

11月18日

本日より赤磐郡熊山町内の石積遺構分布調査を実施する。

比較的低地に存在する石積遺構２基を確認。完全に破壊されている千躰地内の一基から，土器片２を採集する。

11月21日～23日

熊山国有林内，板場池から舟下山を中心に踏査する。深山であり，かつ近年人の入山した形跡はない。特に谷間においてはシダ類が繁茂し，方位が定まりにくい。

板場池の北方に「犬の墓」と通称されている石積遺構があるが，盗掘のため，地山まで掘り下げられており規模不明。

〈写真④〉舟下山1号（犬の墓）石積遺構，盗掘のあと

12月１日

本日より和気郡和気町分布調査。熊山町との境界を中心に調査するも，遺構なし。

12月２日

瀬戸町南山崖頂上付近，聞き込みにより再調査。

12月３日～８日

和気町内の分布調査を続行。熊山連山の中でも特に急峻な山容であり，いたる所で岩盤が露出し急崖とな

っているため踏査困難。

石積遺構は観音堂遺跡の他は全くなし。

12月11日

備前市地域の石積遺構分布調査。地元の東備史談会の諸氏と具体的な調査日程について協議。全日程を約2週間とする。

12月13日～15日

本日より備前市区域の分布調査開始。岡大考古学教室の学生諸氏の協力を得る。美音谷を中心にして遺構は存在するが，ほとんどの遺構が破壊されており，また転用されているものも多い。

12月17日～24日

備前市香登地区および伊部地区の分布調査。月末になると，山頂部に積雪があり，小径では歩行困難。

山頂部までの往復に時間がかかり，予定した日程では，消化が困難となる。備前高校，和気閑谷高校郷土クラブの生徒諸君に調査協力を依頼，調査に参加してもらう。

備前市東部，伊部地区には石積遺構はほとんどない。しかし窯跡は海抜 400mにも存在する。

12月25日～28日

瀬戸町南山崖地区再調査および備前市内調査

1974（昭和49年）1月8日

熊山遺跡緊急発掘調査委員会（調査検討会）を岡山博物館において開催。各調査担当者より調査結果について報告。検討ののち，報告書作成の分担決定。

1月15日

和気町大中山地区において，地元からの石積遺構についての情報により確認調査。

1月26日～28日

和気町内および備前市内の再調査。備前市美音院跡遺構（筒形容器の出土したと伝承される遺構）についてヒアリング調査。

ここに，一部の地域の分布調査を残し，5か月間，実動70日にのぼる調査を終了した。

奈良国立文化財研究所，平城宮跡発掘調査部の協力のもと，岡山県下では初の試みとして石積遺構の図化に写真測量の技術を応用し第7・8・9・10・11・12図のごとく，精度の高い図化に成功した。また，トレンチ調査，石積遺構分布調査についても数々の成果があがった。まずトレンチ調査では，つぎの結果が得られた。①「鐘楼跡」には2つの方形石列がみられ，一つのものは昭和初期のものであり，他のものも鎌倉時代以降の遺構であることが確認された。②国指定石積遺構がつくられた時期には，東側に浅い谷状の地形があり岩盤が露出していたと思われる。岩盤上の遺構の有無については，小トレンチでは確認できないが，何も存在しなかった可能性が強い。③鎌倉時代後半から南北朝初めに建造物があったことが確認されるとともに，下部から平安時代末ごろの須恵器，須恵質土器，土師器，鉄釘の出土があった。もし全域の発掘を実施すれば石積遺構造成時の手がかりが得られるかも知れない。また，石積遺構の分布調査では，48個所を踏査

し，確実またはほぼ確実とされたもの33基におよび，特に赤磐郡瀬戸町弓削の南山崖の石積遺構では，規模も国指定石積と同規模であり，竈を有しているものとして注目された。

いずれにせよ，今回の調査は，あくまで「熊山遺跡」の一貌を明らかにしたにすぎず，謎の石積遺構を中心とする「熊山遺跡」の全貌を明らかにするには，今後の調査をまたねばならない。

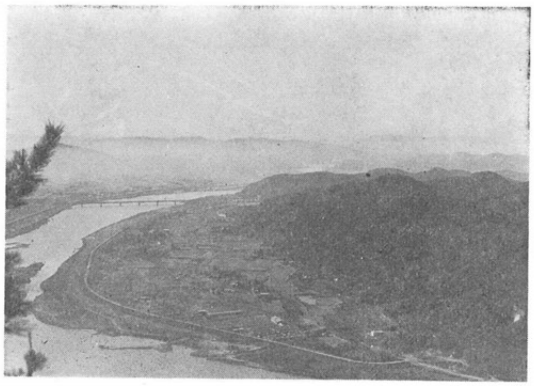
（文責・真野　義一）

第二章　熊山の地理的景観

熊山山塊は旧備前国中央やや東寄りに位置し，東西約7㎞，南北約 6.5㎞を測る。北と西は吉井川によって限られ，南は新幹線・赤穂線・国道2号線の並走する狭長な平地により，東は和気を経て片上港に達する片上鉄道の通ずる曲折した狭い谷によって限られている。標高は 500mをこえ，備前中南部での最高峰である。

四周の裾はいずれも急峻で，とくに西偏する最高地域から吉井川に落ちる大谷の斜面は，露岩のおびただしい急崖で，吉井川にかかる国道2号線の備前大橋方面より望見すると，いかにも霊山の感が深い。そのあたりは赤磐郡瀬戸町弓削(ゆげ)に属している。南の備前市側と北の熊山町側は，いくつもの急な深い谷を形成しており，東の和気郡和気町側もほぼ同様である。標高 350m附近から上は傾斜が急に緩やかとなり，比較的なだらかな小丘状の尾根尾根が複雑な様相を見せて八方へのびている。従って山上は高原状であるが，その中央部付近で，南北から開析の進んだ谷に侵入され，東西に分断されたように見える。東半部は西半部より若干狭く，最高地点も 450m未満であるのに対し，西半部は広く尾根の張り出しも複雑で， 500mをこえる小峰が3に達している。この山上からの眺望はきわめて良好広大で，快晴時には，北は遠く中国脊梁山地，南は東瀬戸内海から四国連山を望見することができるという。

熊山の北麓を現在山陽線が走っているが，東西にのびるこの狭長な平地は，古代の官道である山陽道が通じていた部分であり，津山盆地東部で南下して熊山山塊に突き当たり，その裾を西から回わってついには児島湾に注ぐ吉井川は，古来水運に利用された川であって，上述のように南麓を東西にのびる平地もまた，古今を通じて交通の要路に当たっている。そして，山塊のすぐ南東麓に向かっては，瀬戸内海のおぼれ谷である片上湾が，東南東方向から深く突入しており，また南西麓の南方には，高山の小山塊をへだてて，長船(おさふね)および邑久(おく)千町の沃野が開けている。熊山は自然地形の面からみて，交通上の重要な結節部にわだかまっているともいえよう。



<写真⑤>　熊山より南へ吉井川を望む

熊山の地質は，山頂（ 508.6m）付近から熊山町勢力(りき)・瀬戸町弓削北半にかけ吉井川に向かって扇状に広がる地域と，備前市側南西端（坂根地区）のみが，吉井川をこえて西方へものびる，粘板岩を主とする非変成の上部古生層であり，残るほとんどすべては，備前東部の広大な地域と同じく，中生代後期の火山岩であ

る流紋岩質砕屑岩類となっている。(1)

（文責・角田　茂）

註 (1) 光野千春 大森尚泰 「岡山県地質図」岡山県　昭和38年

第三章　国指定石積の写真測量

Ⅰ　調査目的および期間

この調査は，地上写真測量を応用して，熊山遺跡の現状の精密な記録保存用資料を得ることを目的とし，あわせて同遺跡修復に資するため熊山町の依頼により奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部　計測修景調査室が行なったものである。

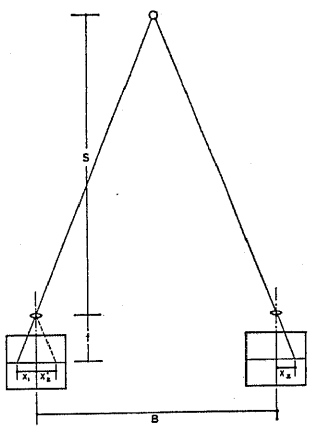
撮影は昭和48年10月２～９日に行ない，翌年１月に図化および測定を行なった。

Ⅱ　実測調査方法

実測調査は石積遺構を地上写真測量により，附近の地形は平板測量によって行なった。ここで地上写真測量の原理を簡単に説明する。

われわれが立体的な奥行きを感じたり，遠近を知ることができるのは，経験上遠いものほど小さく見えることを知っていることにもよるが，両方の眼が約65㎜へだたった位置から物を見ているからである。このような実体感覚は，直接に肉眼で物を見ている時ばかりでなく，双眼鏡のような光学器械を通して観察する場合にも起る。

これはわれわれの目が単に目に入ってくる光線の最後の経路だけを認識するという性質をもつているためである。したがって，左右に適当な間隔をへだてた２地点から撮影した２枚の写真を，右の眼で右の写真，左の眼で左の写真を眺めることができたら，ちょうどカメラの位置に目をおいてながめるのと同じ感覚が得られ，しかも，この場合カメラの間隔は両眼の間隔より大きいから，実際に眼でながめるよりも立体感が一層誇張されて見えることになる。



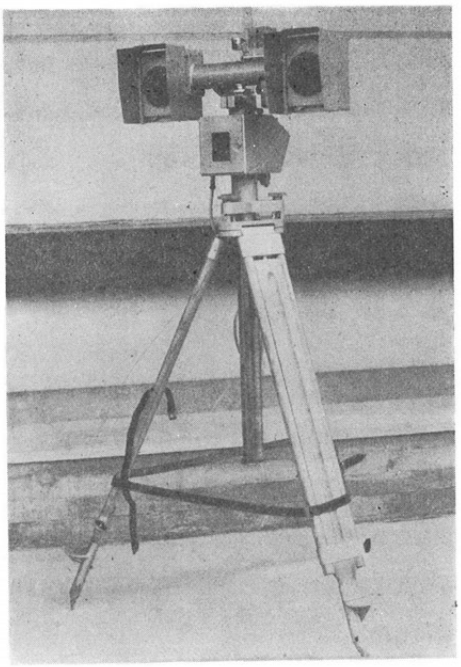
第１図　写真測量の原理

写真測量はこの原理を使って誇張された立体像について測定を行なうのである。

地上写真測量では，適当な間隔（撮影基線）をへだててカメラを水平に整置し，平行に２枚の写真をとる。地上の点をX，Y，Z（Xは撮影基線，Yは奥行，Zは高さ）で表わすと，乾板面はX－Z面になり，カメラ軸はY方向に向く。たとえば第１図でSだけ離れた点にある物体を，焦点距離fのカメラでBだけ離れた位置で撮影したとすると，写真面にはそれぞれ画面の中心からx_1，x_2の位置にうつる。これから距離S

を$S=Bf/x_1+x_2$で求めることができる。したがって,地上写真を使って位置を正確にきめようとすれば，撮影に当たって2つのカメラ位置を水平かつ平行に据えることのほかに,焦点距離,撮影基線が正確にきめられなければならない。また小さい乾板に縮写された映像をもとにして測定するのであるから，レンズのわずかな収差も誤差の原因になるし，乾板面の凹凸や伸縮も，乾板面がレンズ軸に正確に垂直になっているかどうか，ということも精度に大きな影響を与える。このため写真測量には特殊なカメラ（第2図－①)･図化機（第2図－②）を必要とするが，しかし写真測量を応用すれば，作業が迅速で，精度にむらがなく，また乾板を保存する限り必要に応じていつでも撮影時の状態を再現できることなどの利点がある。

今回の作業は（a）投影面の設定，（b）撮影点の決定，（c）基準点の設置およびその計測，（d）撮影，（e）図化・測定の順序で行なった。以下各作業について述べる。

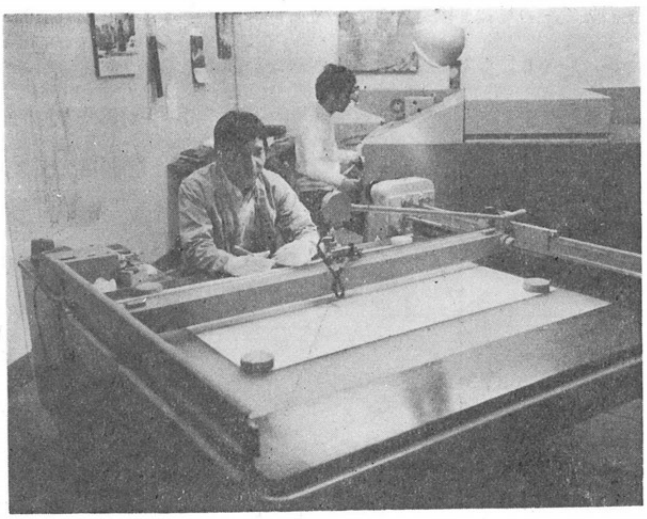


第2図－①　写真測量用カメラSMK40

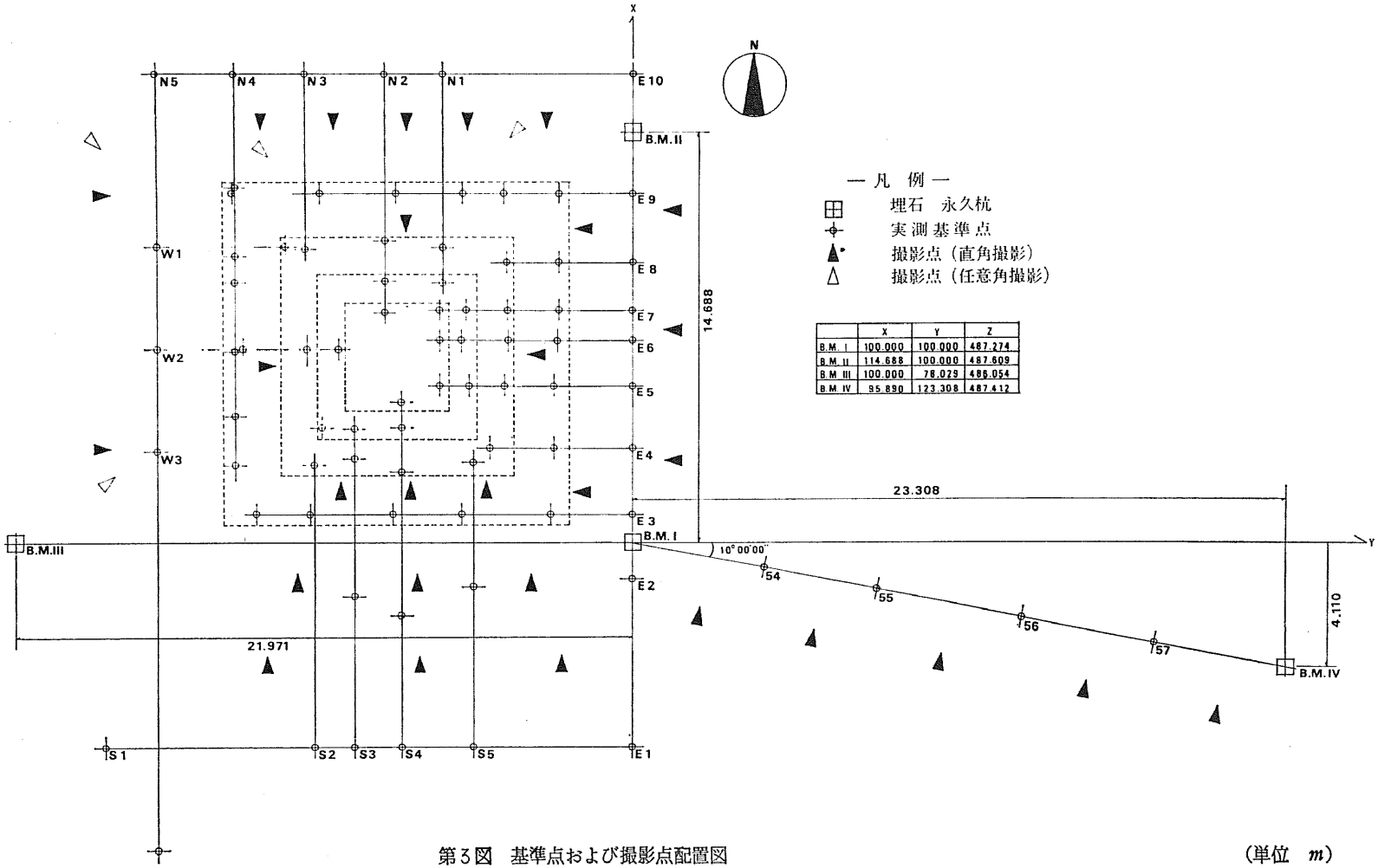
a 投影面の設定

先にのべたとおり，写真測量では適当な間隔（撮影基線）をおいてカメラを水平に整置し，平行に2枚の写真をとる。この写真をもとに図化を行なうのであるが，出来上った図は撮影基線を含む鉛直面への正射投影図となる。したがって，立面図を作成するためにはまず投影面を決定しなければならない。

4段で構成される石積遺構の各段における直角度，段毎のねじれが分かる平面図がない段階で，投影面をどう設定するか，技術的に議論の分かれる所であったが，結局，最長辺を持つ最下段で，しかも比較的石積の面がそろっている南辺に平行な面を投影面とし，他の面は，これを基準にそれぞれ平行または直交するように設定した。これらの投影面は後述する基準点からいつでも再現できる。

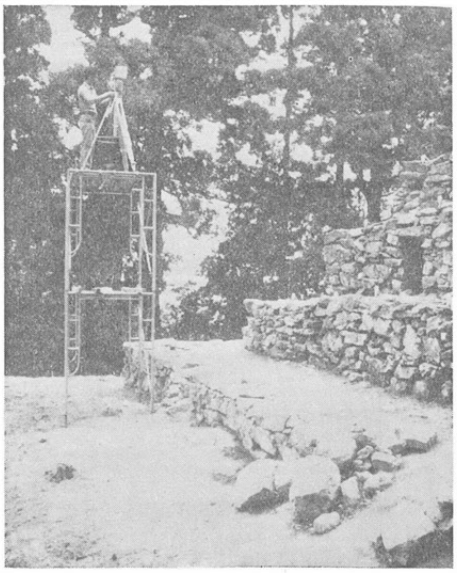


第2図－②　図化機　ステレオメトログラフ



	X	Y	Z
B.M. I	100.000	100.000	487.274
B.M. II	114.688	100.000	487.609
B.M. III	100.000	76.029	486.054
B.M. IV	95.890	123.308	487.412

第3図　基準点および撮影点配置図　　（単位　m）



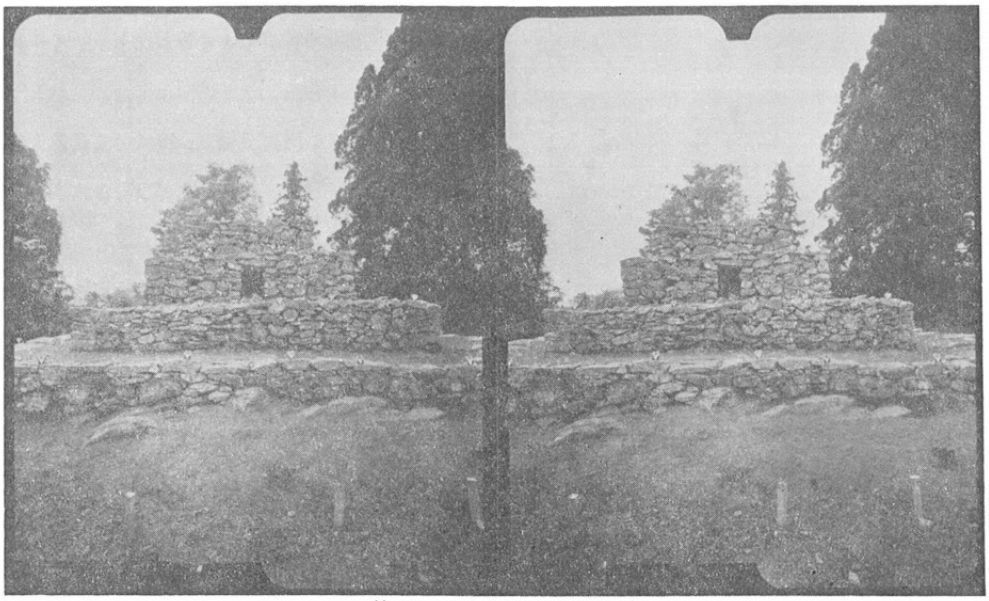
第4図　撮　影　作　業

b　撮影点の決定

前述した投影面に平行及び直交する面で第3図　に示した▲印に撮影点を定めた。ただ図中△点は，他の点からの死角を補うため平面図作製用に，投影面に対し任意の角度で撮影した点である。なお一部の撮影点では櫓を用い，カメラの高さを地上 5.5mの高さに設定し，死角を出来るだけ少なくするよう努めた。

c　基準点の設置および計測

図化測定は東独 Zeiss 社製ステレオメトログラフE型で行なった。この図化機の機構を簡単に云えば，投影器に乾板をのせ，その後方より光を送って現地と同じような光模像をつくり，この光模像について測定を行なうのである。したがって，測定精度を高めようとすれば，ここにできる光模像は実際の対象物の正確な縮図でなければならない。そこで2つのカメラの関係位置や，各方向から行なう測定の関係をつけるため，あるいは正確な縮尺をきめるためなどの目的で基準点を設置する必要がある。今回は，1モデルの乾板に最低3個の基準点が入るよう，計58点の基準点を設けた（第3図）。図化に先立ち，これらの基準点の位置を



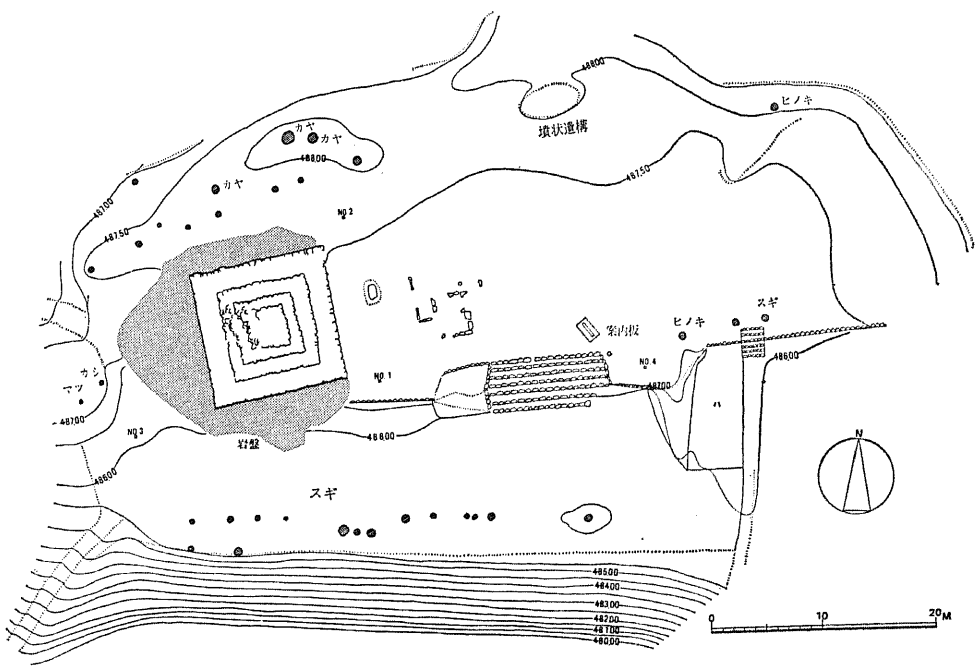
第 5 図　東立面図用対写真

適当な縮尺で図紙に展開しておき，写真から測定して得られた点と，どの程度よく一致しているかによって図全体の正確さを知ることができるし，また所望の精度になるまで図化機の規正を行なうよりどころとなるものである。そのため，それの測定には細心の注意をもってあたり，精度を高める必要がある。今回は1秒

読みのセオドライトと鋼巻尺，およびレベルで直接計測し，その精度は± 1.0㎜，また標定精度は図上で± 0.1㎜におさめた。なお投影面設定に際し基準面とした南面最下段に平行な2点，BMⅠ，Ⅱ，およびそれに直交するBMⅢ，さらに石積遺構に隣接する石垣および階段に平行した基準点BMⅣ（BMⅠとBMⅣを結ぶ線が石垣に平行である）を設け，それぞれコンクリート杭を埋設した（第3図）。なお，使用した乾板約15ダースであったが，このうち図化，測定に使用したのはその約⅓である。石垣および階段については基準点を設置し，撮影も行なったが今回図化までには至らなかった。

d 図　　化

先に述べたとおり図化・測定には東独Zeiss社製ステレオメトログラフE型を使用した。この器械は構造上Y軸とZ軸の切換えが出来るので，垂直に撮影された地上写真を用いる場合，一定の高さの水平面で切った断面線（地図の等高線と同じ）を描く事も出来るし，撮影基線に平行な鉛直断面線を描くことも出来る。立面図では石積は輪郭線で，岩盤部分は20㎝間隔の鉛直断面線で描画し，平面図は20㎝（岩盤部分は10㎝の間曲線を入れる）間隔の水平断面線（等高線）で図化した。なお，平面図は水平写真による図化であり，普通の平面図では表現しないオーバーハングで隠される部分も図に示した。そのため第7図に示した如くやや繁雑ではあるが5種類の線を用いてすべてを表示した。また測定座標値により，東西，南北断面図をもあわせて図化した。なお，周辺の地形は別に平板測量で行ない，石積部分は写真測量による平面図を縮小合成した（第6図）。



第6図　石積遺構周辺地形図

Ⅲ 成　　果

今回の成果品は

1. 周辺地形図　縮尺1/200（等高線間隔50cm）（第６図）
2. 石積平面図　縮尺1/20（等高線間隔20cm）（第７図）
3. 東立面図　〃（第８図）
4. 西立面図　〃（第９図）
5. 北立面図　〃（第10図）
6. 南立面図　〃（第11図）
7. 断　面　図（東西，南北断面）〃（第12図）

である。

成果は図版に示した通りであるが，ただ平面図について多少の検討を加えた結果の概略について述べておく。

今回実測の基準とした石積遺構の南面最下段東西線を基準線とし，各面の微小な凹凸を無視した場合，

1．南面は２段目，３段目とも平行で，テラスの幅は1.83m，1.3mである。

2．北面最下段，２段，３段，４段とも基準面に平行で，テラスの幅はそれぞれ1.92m，1.27m，0.90mである。

3．東面の最下段と２段目は互いに平行で，基準面となす角はほぼ91°40′であり，その幅は，1.95m，また３段目と４段目も互いに平行で基準面となす角はほぼ88°45′で幅は0.90mである。

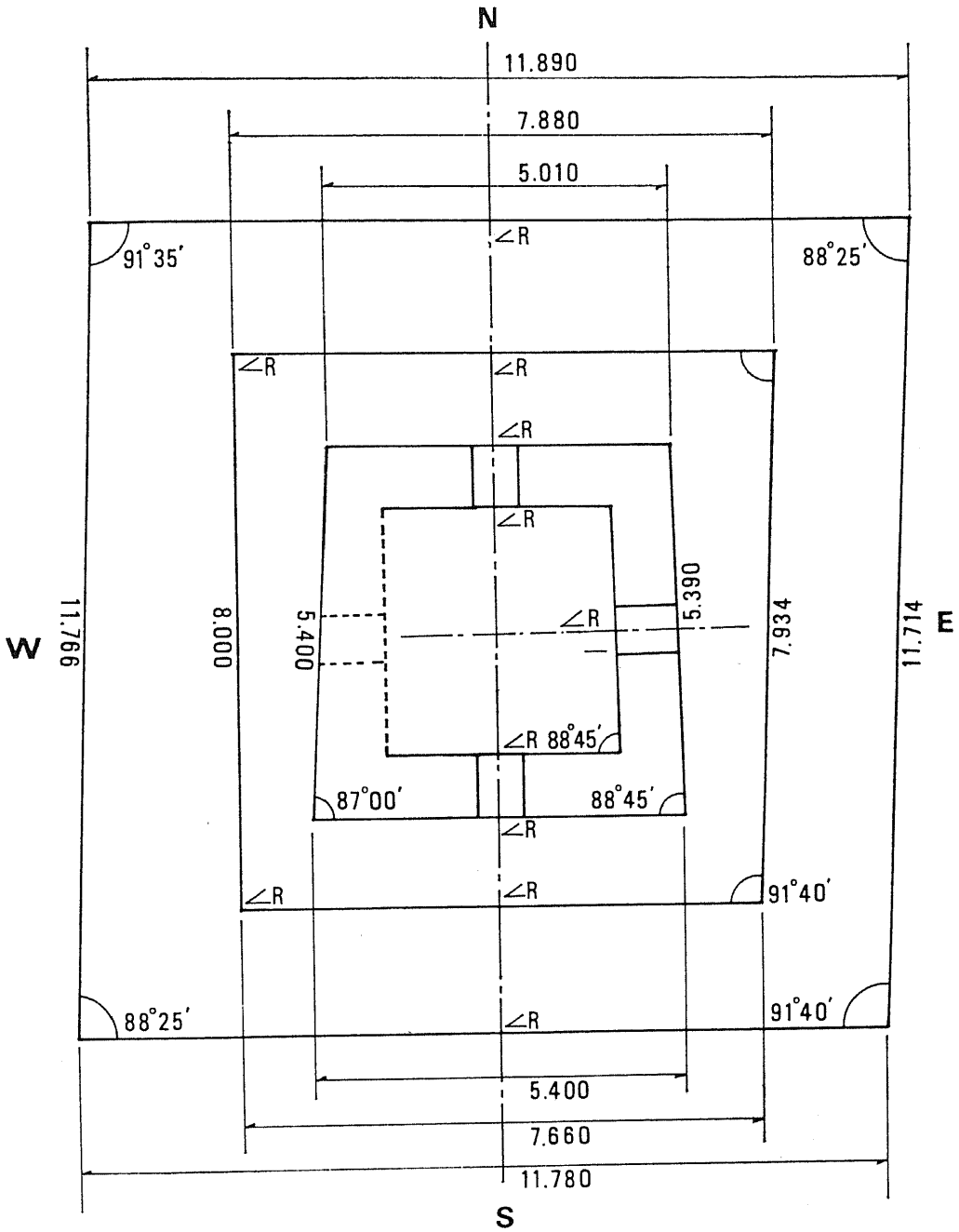
4．西面については，最下段が基準面と88°25′，２段目が90°00′，３段目が87°00′である。

5．３段目にある龕のそれぞれの中心線を引き通した場合，南北線は基準面と直交し，東西面ほぼ1°15′，東で北へ振ると推定される。なお南北線と磁北とのなす角は北で西へ10°30′振れる。

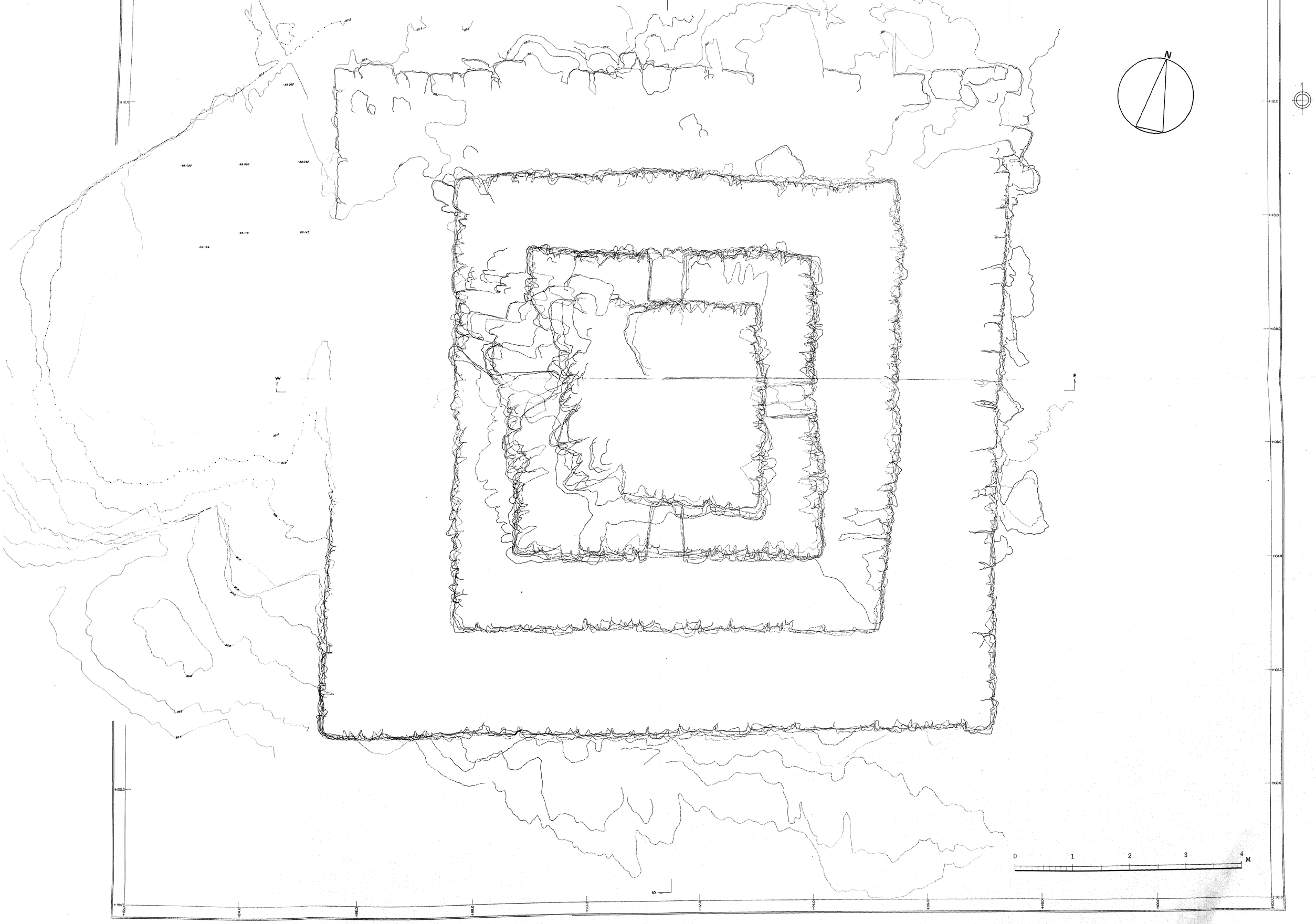
6．３段目のテラスの幅はすべて0.90mであり，それは南，北，東に残る龕の奥行きに一致する。

ということが云える。第13図はそれを模式的に示したものである。

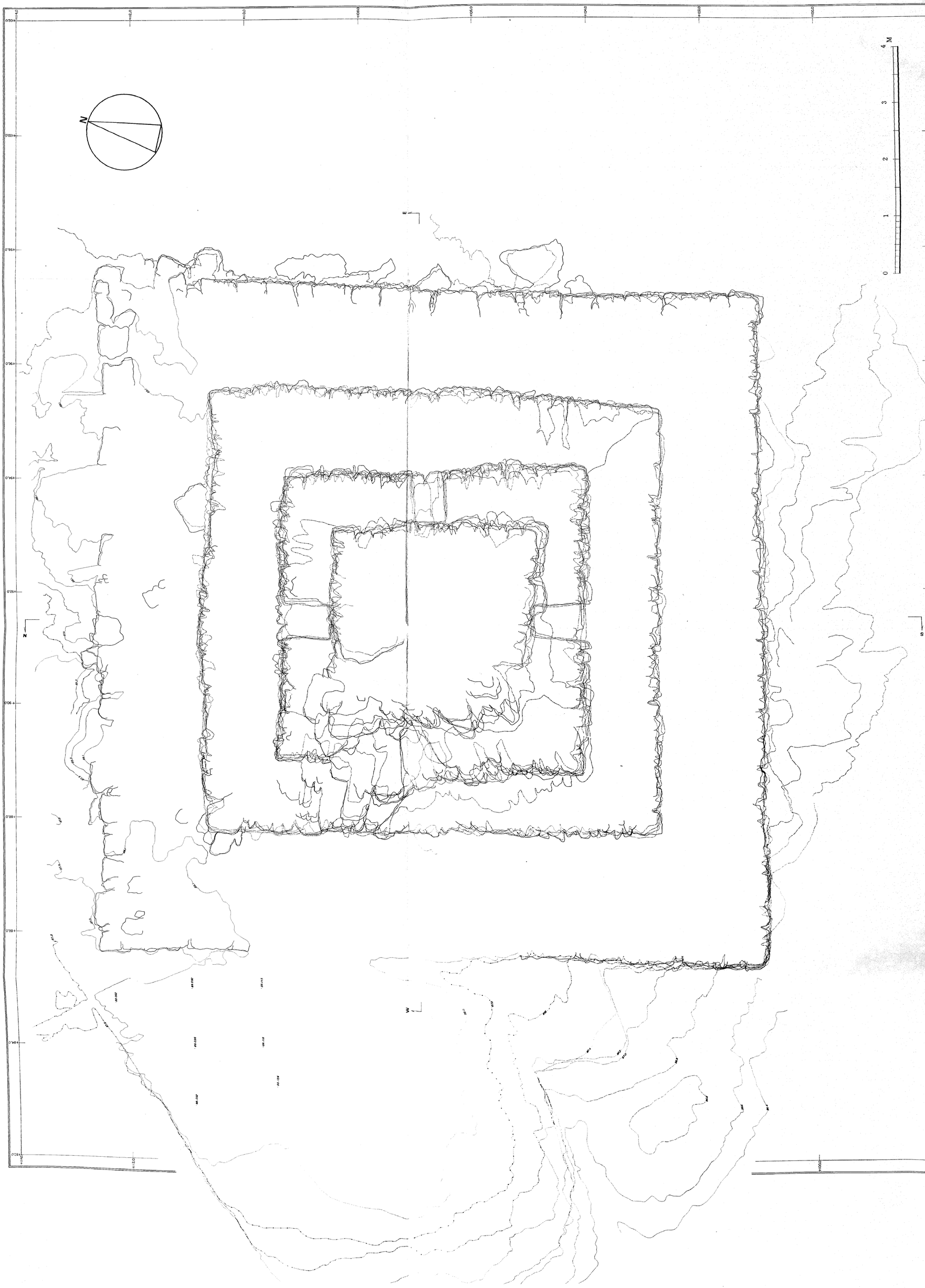
（文責・牛川喜幸）

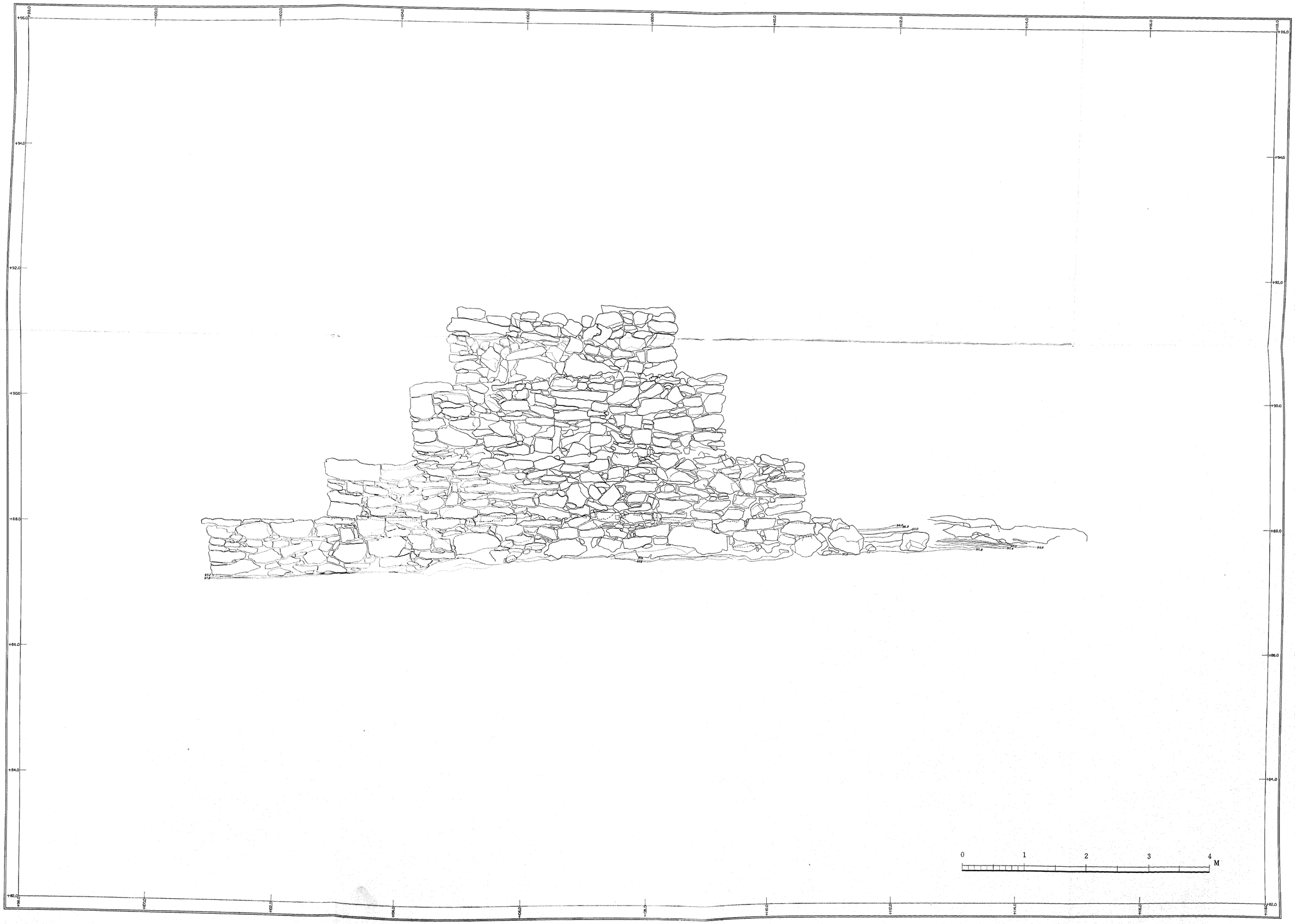


第13図　石積遺構模式図　　（単位　m）

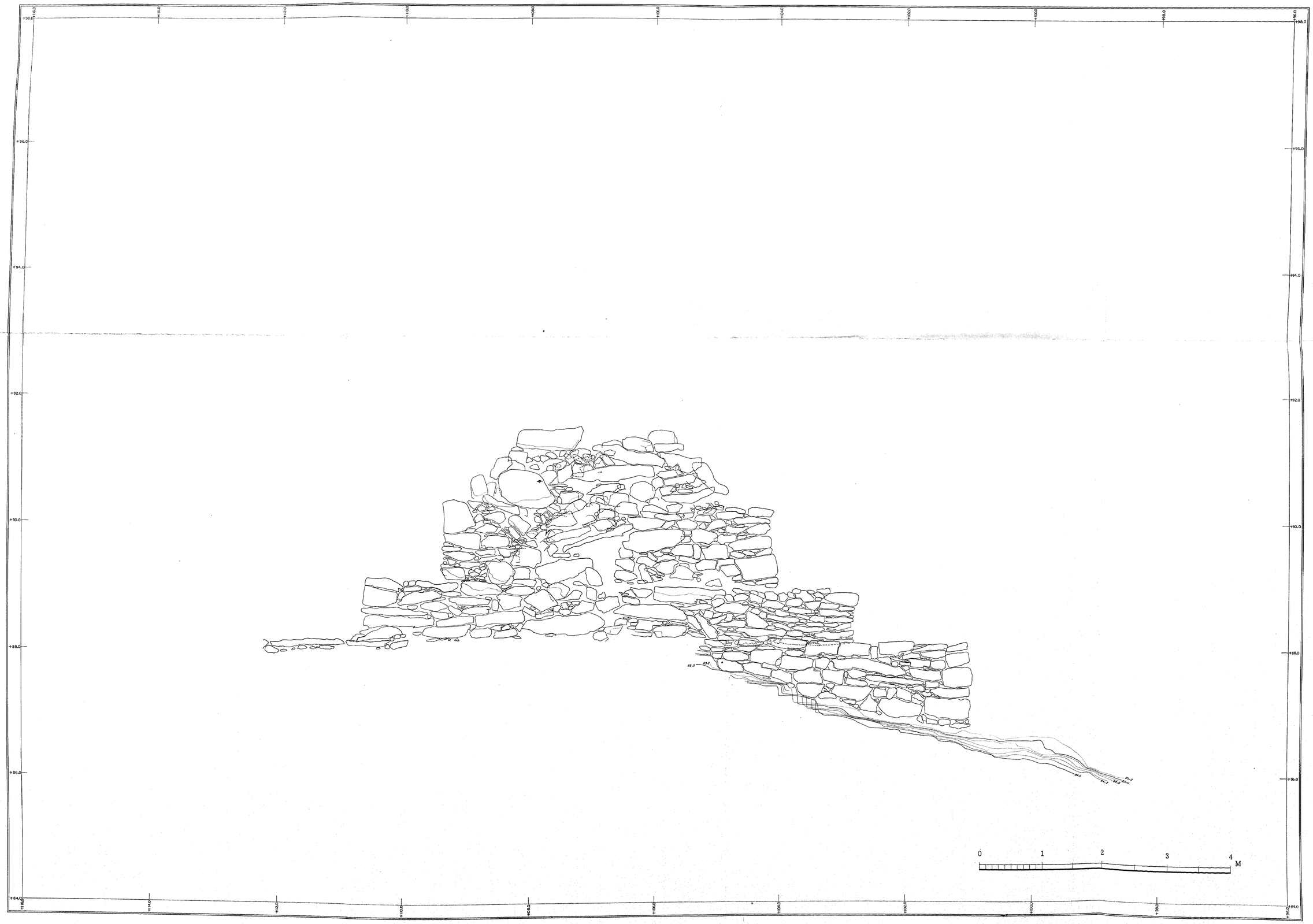


第７図　石積遺構平面図

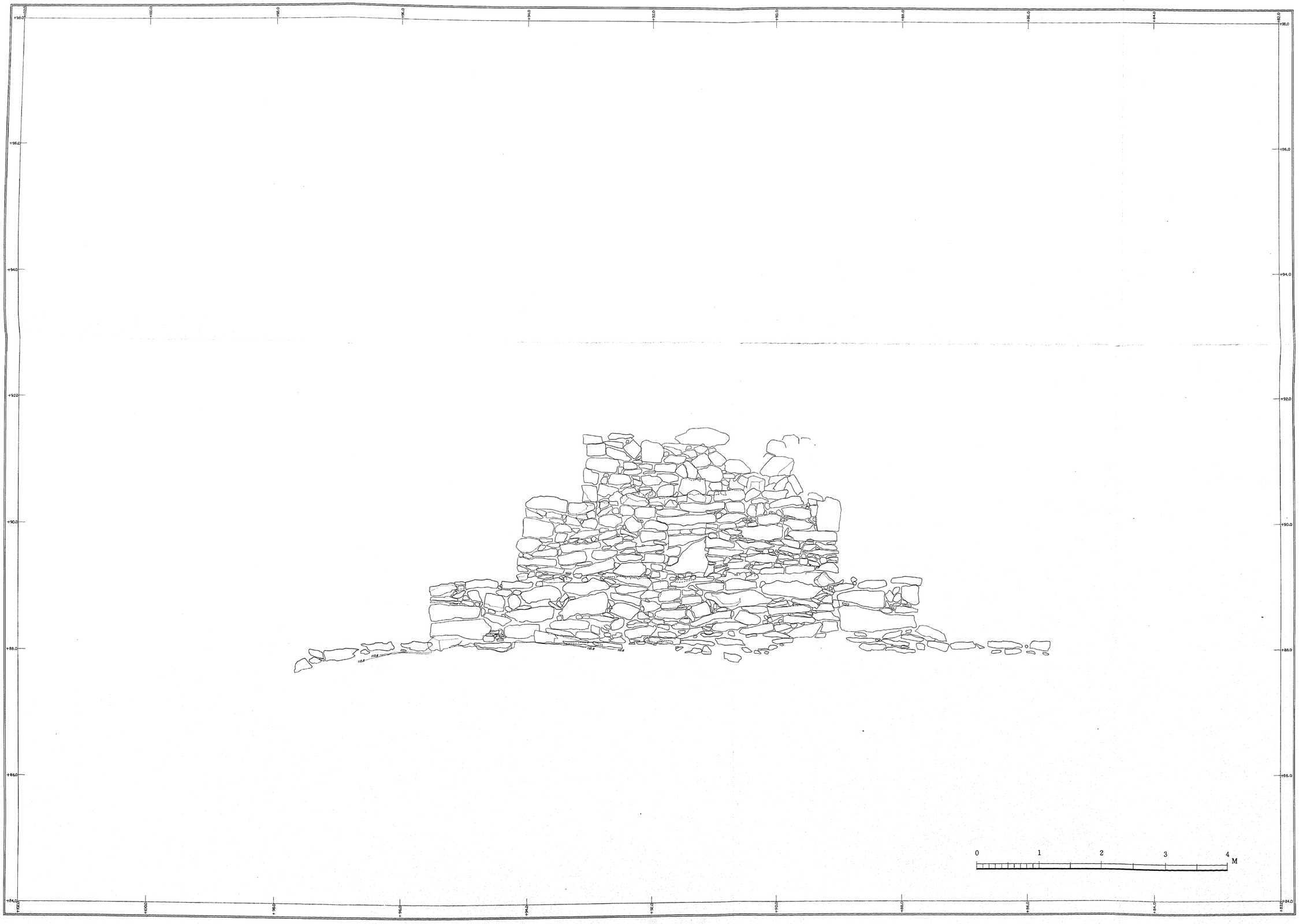

N
0
1
2
3
4
M
E
N
S
W



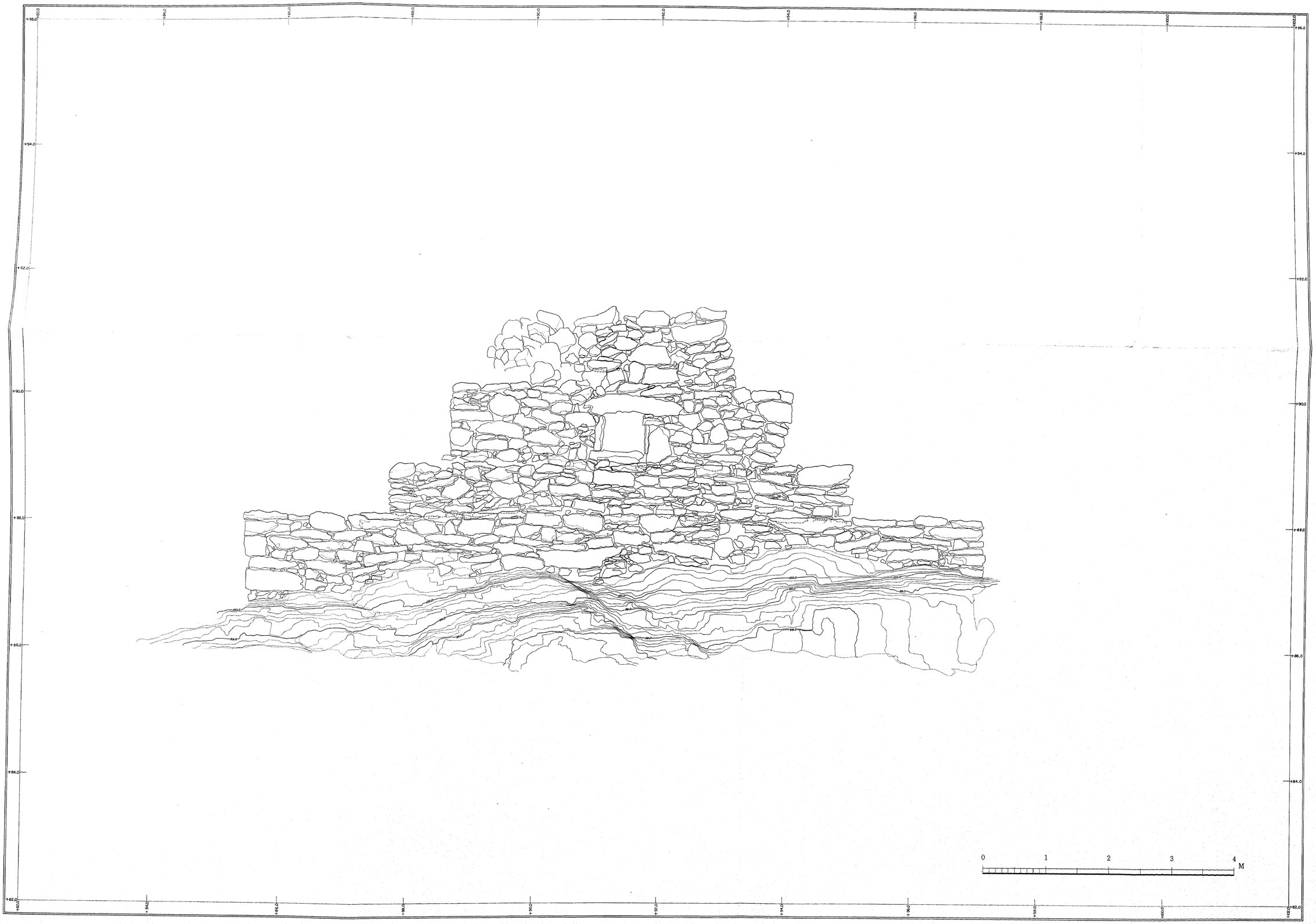
第８図　石積遺構東立面図



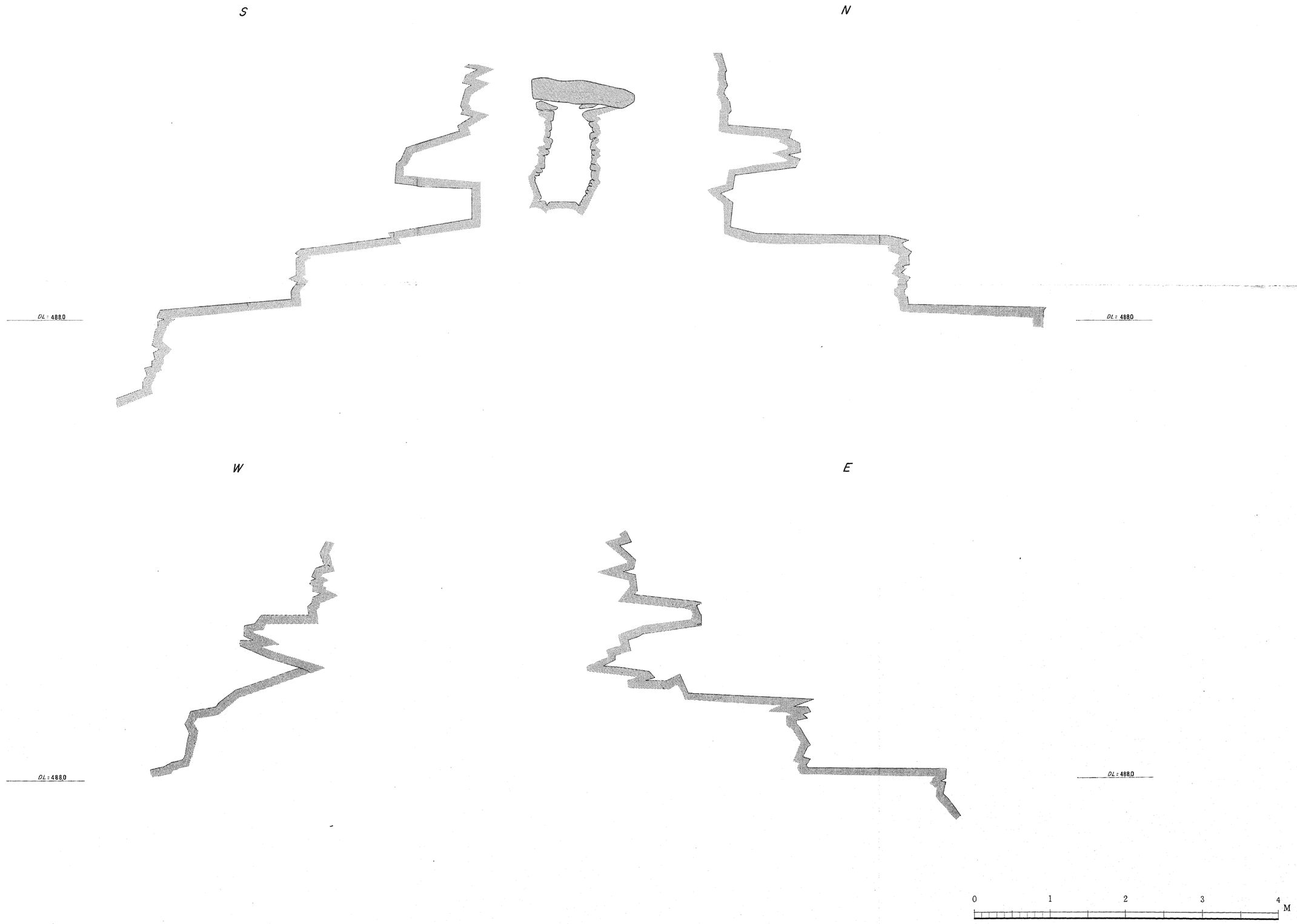
第９図　石積遺構西立面図



第10図　石積遺構北立面図



第11図　石積遺構南立面図



第12図　石積遺構断面図

第四章　トレンチ調査

石積遺構の東側の平坦地に２本のトレンチを設定した。トレンチは「鐘楼跡」と呼ばれている石の配列が所在することから，これにかかるようにした。基準杭№１より№２を基準線として，№１より№２へ５ｍのところで東西方向へ，また東へ５ｍのところで直交する南北方向のトレンチを設定した。それぞれ東西方向をＡトレンチ，南北方向をＢトレンチとする。交点を０とし，東西南北へそれぞれ 2.5ｍずつの区画を設け，Ｎ―１，２，３，４，Ｓ―１，２，３，４，Ｅ―１，２，３，４，Ｗ―１，２，３，に区分した。各区画間には50cm幅の壁を残して掘り下げた。遺構の検出される部分については，これを残すことにしたため，「鐘楼跡」と呼ばれる部分は一部を掘り下げただけである。土層断面図はＡトレンチが№１より北へ４ｍ，Ｂトレンチが№１より東へ５ｍの位置である。

Ⅰ　Ａトレンチについて

Ｗ―１，２区については新しい時期の攪乱がおこなわれている。Ｗ―１区は岩盤まで達し，Ｗ―２でも上半部を攪乱している。この土層には近代の瓦が多量に含まれ，炭，灰を含む。第２層は黄褐色土で礫を含み，土師器と瓦の破片も含まれている。瓦は西端の瓦溜りのものに類似するものである。第３層は礫まじり灰色土で瓦の破片を含んでいる。第４区では鉄釘も検出された。第４層は礫まじり黄色土で遺物は含まれていない。かなり大きな礫を多く含み，北側の高い部分を削平して造成した盛土である。第５層は灰色～黒色土で炭化物を含んでいる。ところによって炭を多量に含んでいる。Ｅ―３区は特に著しい。第６層はやや明るい色で淡灰色土を含んでいる。第７層は第５層とほぼ同様であるが，西方では不明確である。この層の下層にはうすく細砂層が認められる。第８層は淡灰色粘土で，砂粒をあまり含んでいない。５～８層においては須恵器，須恵質土器，土師器，鉄釘を含んでいる。また格子目の施された平瓦の小破片を１片検出している。須恵質土器の完形品も第８層に底部をおいて検出された（第16図④）。第９層は淡灰色粗砂である。西端部の瓦溜り（第11層）は焼土と瓦がほとんどで土を含んでいない。瓦は地山までつづき岩盤上には比較的保存のよい軒平瓦が含まれている。岩盤は西端部で高まり石積がのっている。東へ約２ｍの平坦部ののち傾斜し，約12ｍの間で東西方向には水平を保っている。Ｅ―４区で40cm位高まり東へ続く。さらに東の状況は明らかでない。

Ⅱ　Ｂトレンチについて

Ｂトレンチは北が高く，南へ傾斜している。Ｓ―３区の部分で石垣となり裏込めがみられる。土層の状況はＡトレンチとほぼ同様であるが，第４層は西端では厚くなっている。Ｓ―２区における５層はほとんど炭

である。第5～7，12層には須恵器，土師器の破片を含んでいる。S－4区では第5層がやや厚い。第12層は礫まじり灰色土で，土師器片を比較的多く含んでいる。土師器には高台付と糸切り底のものがある。この層からは縄目の平瓦2片も検出された。岩盤は北から南へ向かってゆるやかに傾斜している。トレンチより北では表土下は岩盤で，北の地山を削って南を造成したようである。

【トレンチ調査の結果について】

トレンチ調査によると石積遺構の東側平坦地は造成によってつくられたことがわかる。最下層部から検出された須恵器，土師器の破片は平安時代末と推定される。石積遺構がつくられた時には平坦地の造成はなされていなかったことがわかる。第4層の造成土の中には多量の礫を含んでいることから，北側と東側が削平されたと考えられる。当初は石積遺構の東側に浅い谷状の地形が存在したもので，後に平坦地が造成されたものである。岩盤上面の遺構の有無については小トレンチでは確認できなかったが，何も存在しなかった可能性が強い。西端の瓦溜りは南北方向につづく。

【瓦溜りと東側造成地の関係について】

石積遺構の東側瓦溜りは表土を除くと岩盤まで瓦と焼土で埋没している。1m幅のトレンチ調査においても長さ約4mの部分でりんご箱6箱分の瓦を出土している。瓦溜りと造成層との関係を知る手がかりとなる部分がAトレンチでは攪乱土となって確定を困難にしている。断面図に示した反対側の断面においてはほぼ第3層付近まで瓦と焼土の層が確認されることから，第4層の造成土よりのちの堆積と考えるのがもっとも妥当性がある。Bトレンチの第3区第8層で格子目のたたきを施した平瓦片2個が検出されている。トレンチ調査区域内では少量しか検出されていないことから詳しい年代は決めがたい。同じ土層に含まれている土器片は平安時代末頃の遺物が含まれている。造成に先行して所在した瓦と推定される。瓦溜り中の瓦にはいくつかの種類があり古い様相のものもあって，浅い谷状地形の存在した時期にも近くに建物が存した可能性がある。

Ⅲ 遺　　物

1 土　器　類

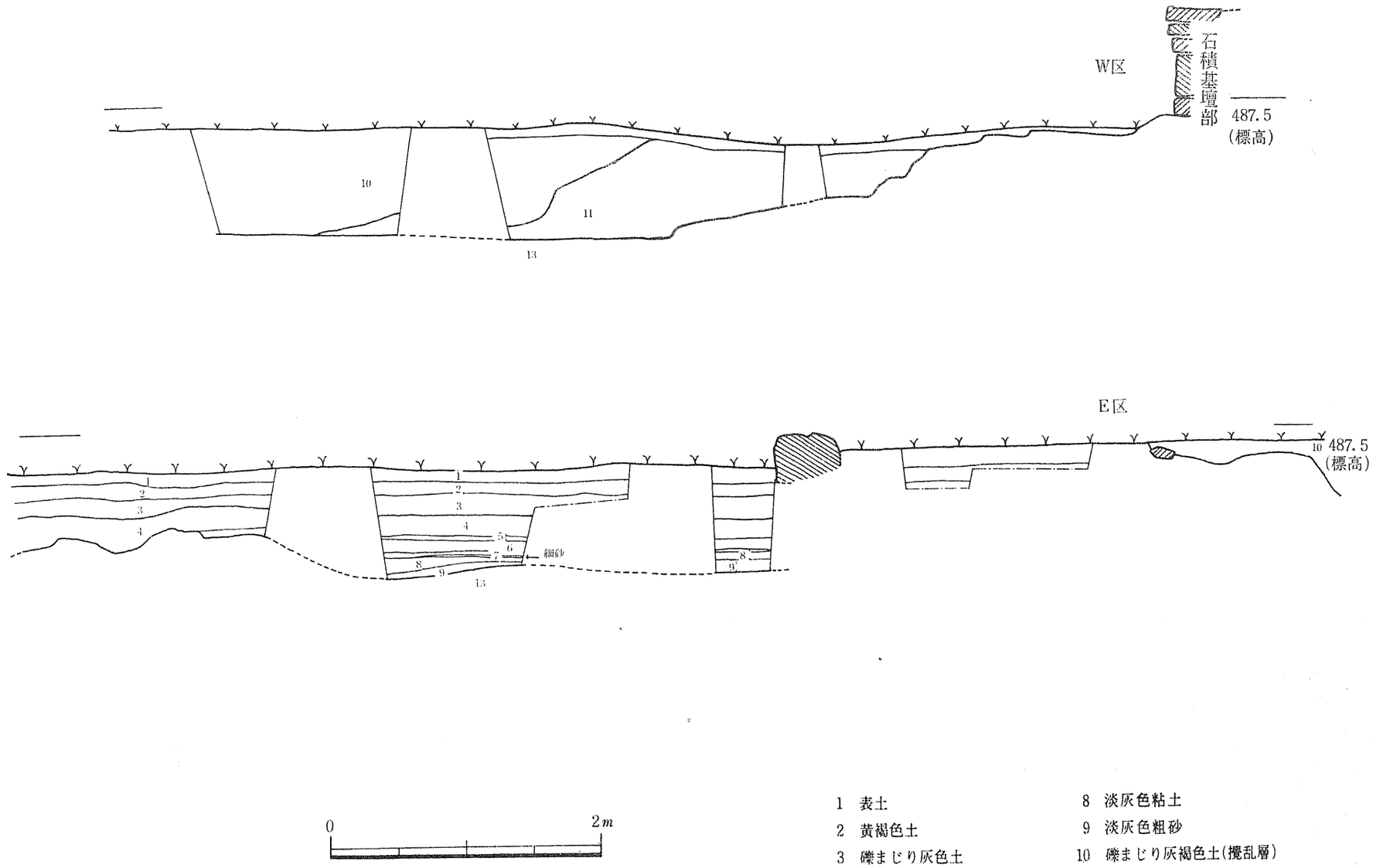
トレンチ調査と石積遺構周辺の清掃中に検出したものである。種類は須恵器，須恵質土器，土師器，備前焼等がある。

須恵器（第16図1～3）

須恵器は3点ある。いずれも器形は杯である。

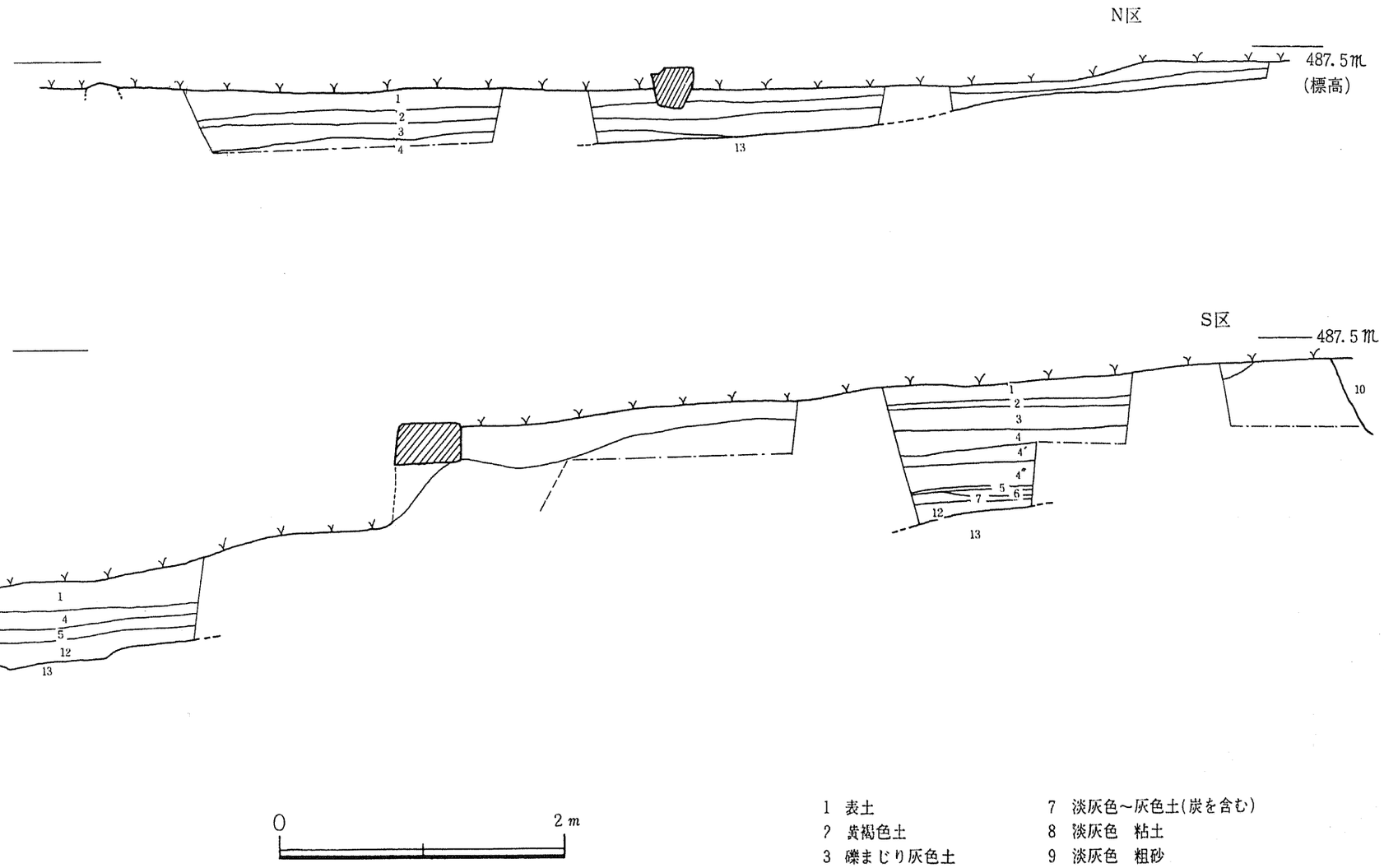
須恵質土器（第16図4～9）

須恵質土器はE－3区・下層（4，5），E－4区（6，7，9），他に「鐘楼跡」の周辺清掃中に出土したもの（8）がある。3は完形品で口径14.8cm，器高 4.7cm，色調は灰白色を呈する。4は3と同様の破



1 表土
2 黄褐色土
3 礫まじり灰色土
4 礫まじり黄色土
5 灰色～黒色土(炭を含む)
6 淡灰色土
7 淡灰色～灰色土(炭を含む)
8 淡灰色粘土
9 淡灰色粗砂
10 礫まじり灰褐色土(攪乱層)
11 黄褐色土まじり瓦層(瓦溜り)
12 礫まじり灰色土
13 岩盤

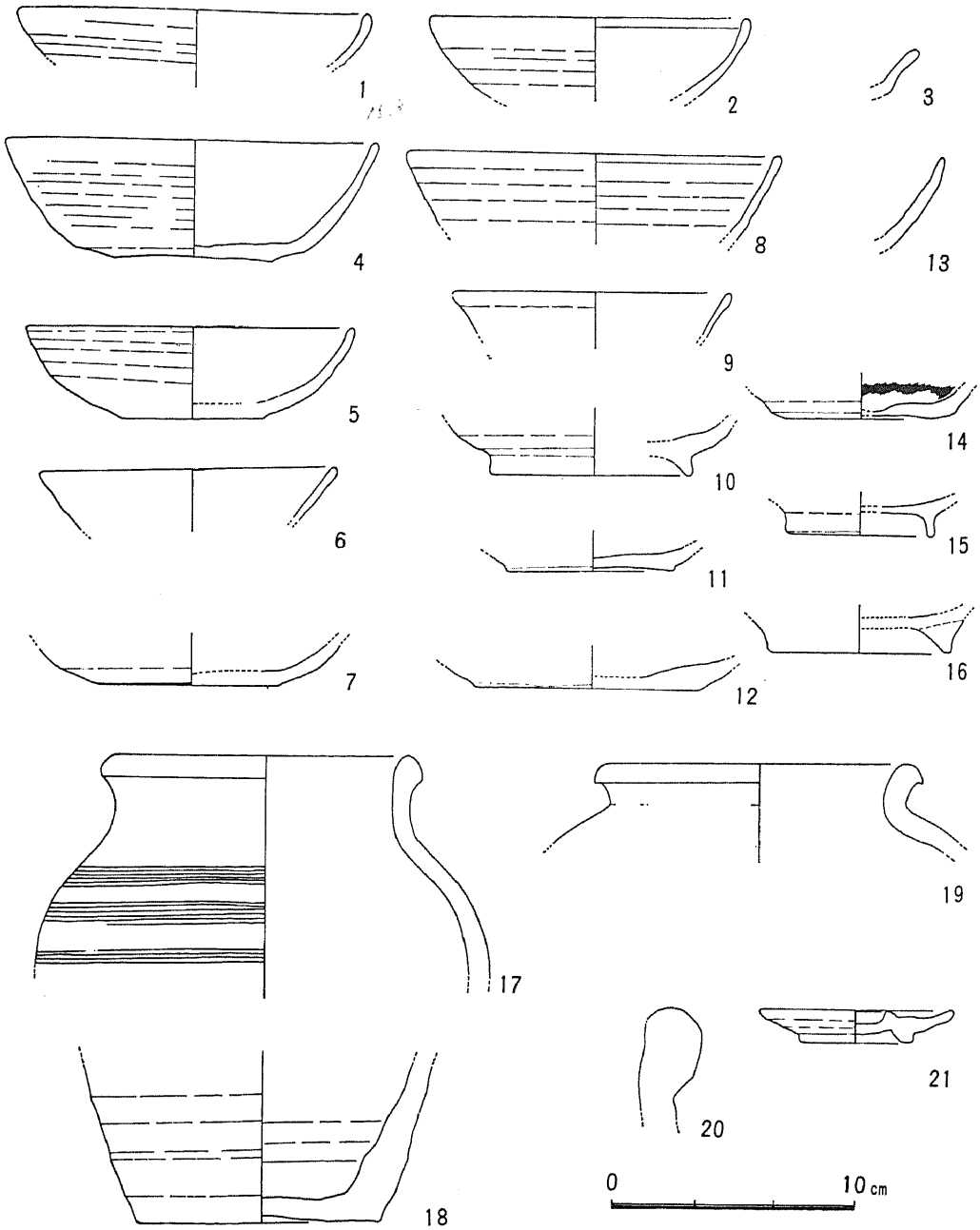
第14図　Aトレンチ土層断面図



1 表土
2 黄褐色土
3 礫まじり灰色土
4 礫まじり黄色土
4′ 礫まじり黄褐色土
4″ 灰色土
5 灰色～黒色土(炭を含む)
6 淡灰色土
7 淡灰色～灰色土(炭を含む)
8 淡灰色 粘土
9 淡灰色 粗砂
10 礫まじり灰褐色土(撹乱層)
11 黄褐色土まじり瓦層(瓦溜り)
12 礫まじり灰色土
13 岩盤

第15図 Bトレンチ土層断面図

片であるがやや小さい。いずれも底部は糸切り底である。他の破片も同様である。



第16図　熊山遺跡出土遺物実測図

土師器（第16図10～16）

器種はほとんど皿形の土器片である。底部は糸切り底と高台付のものがある。口縁部は外開きになっている。胎土は細かい砂粒を含み，色調は黄褐色を呈する。年代は平安時代～鎌倉時代頃と考えられる。ほかに新しい時期の燈明皿（21）がある。

備前焼（第16図17～20）

石積遺構の周辺部の除草作業中に採集されたものである。特に古いものはみられないようである。器形には壺，すり鉢などがみられる。

2　瓦

瓦は石積遺構の周辺部をはじめ，広範囲にわたって採集される。従来の報告においてもふれられているが，軒平瓦，軒丸瓦，平瓦，丸瓦の破片が多量に出土している。特に石積遺構の東側の瓦溜りから多量に出土し，E区，N区，S区の第3層（礫まじり灰色土）中に含まれている。他にはS－5区第12層とE－3区第6層から少量出土している。西側の瓦溜りの瓦は焼けており黄褐色を呈する。

軒丸瓦（第17図1，2，6）

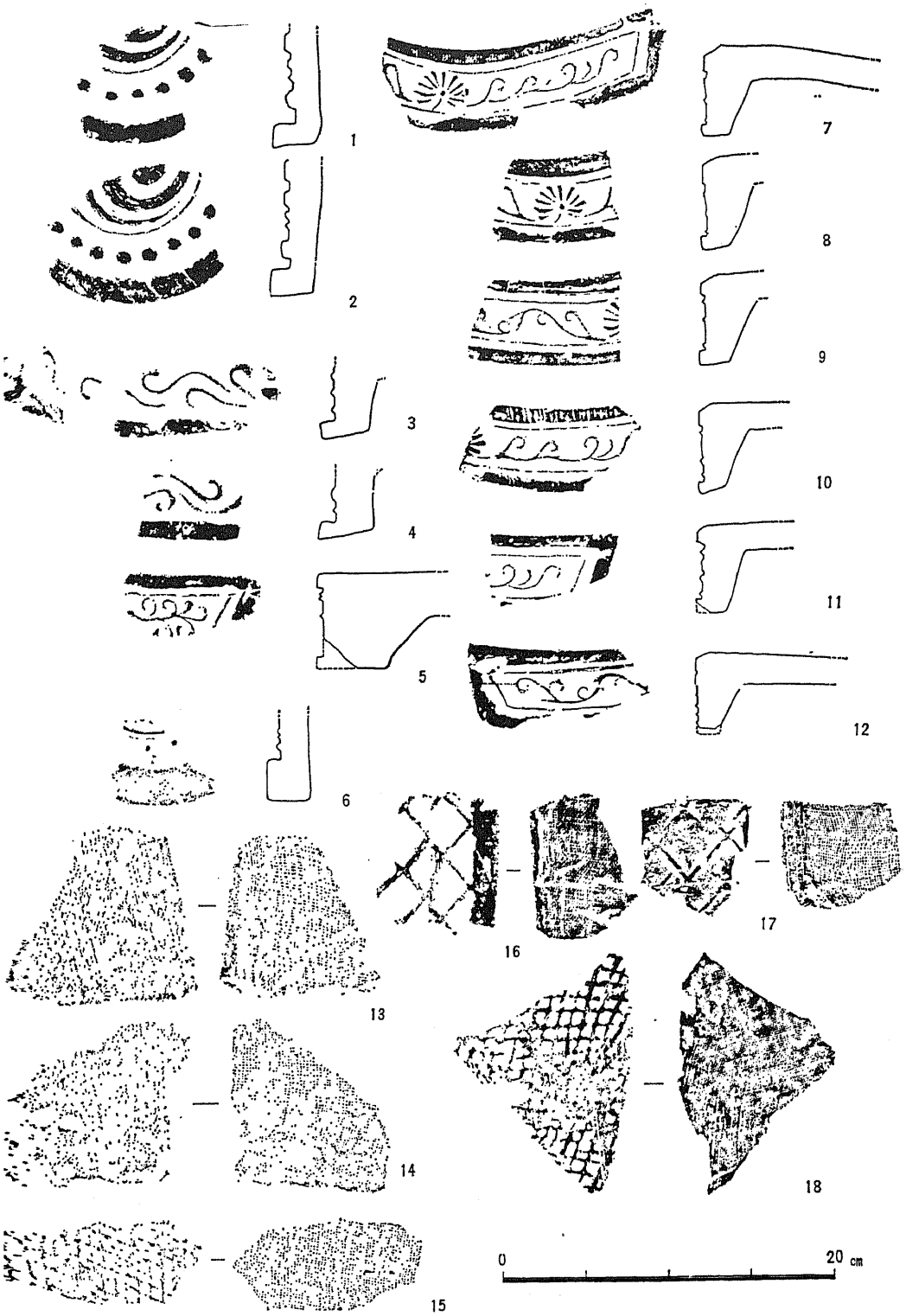
検出されたものはわずか数個の小破片である。完形のものはないが，いずれも巴文である。巴は著しく尾の長い形である。1，2は彫りが深く，6は彫りが浅い。

軒平瓦（第17図3～5，7～12）

石積遺構の東側の瓦溜りから検出されているが，完形のものはない。彫りの深いもの（3，4）と浅いもの（5，7～12）がある。前者は中央部ははっきりしないが唐草文を配している。後者は中央に菊様の文様を配し，左右に細い唐草文を配している。軒平部分を欠失しているが，平瓦部分を残すもの（第18図）で大きさを測ると長さ40cm，巾27～30cm厚さ3cmである。

丸　瓦

丸瓦は少量出土している。外面は磨かれているが，内面には布目痕がみられる。

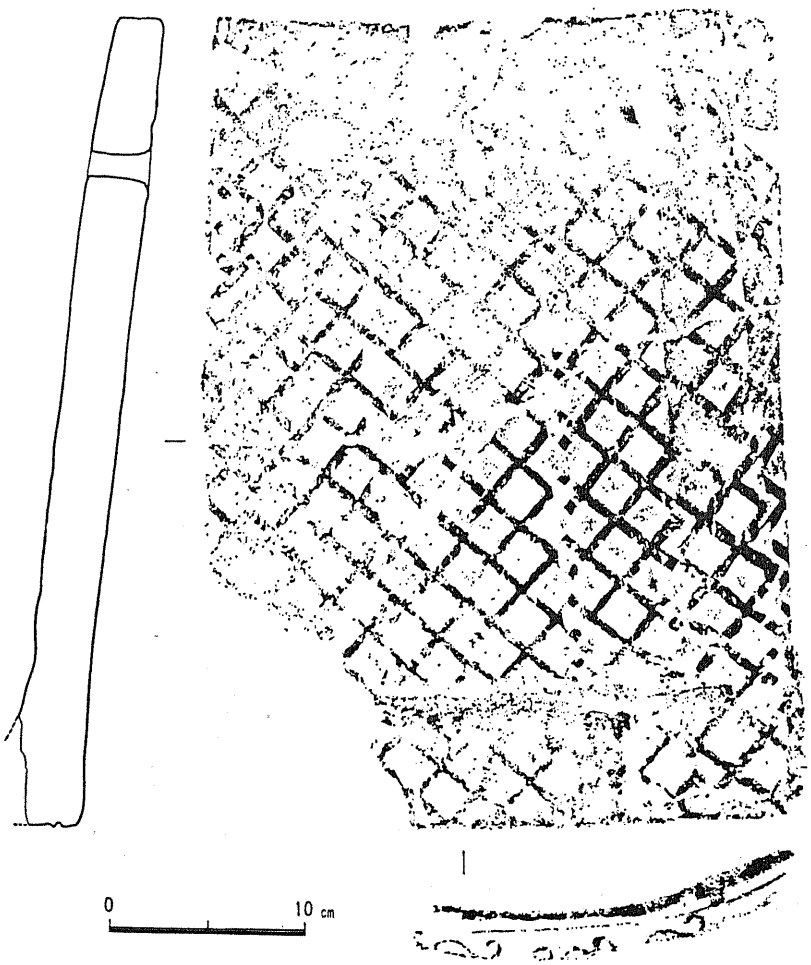


第17図　熊山遺跡出土瓦実測図

平　瓦（第17図13〜17）

出土した瓦の大部分が平瓦である。表面にはいずれも布目痕が残り，裏面は大部分が格子文の叩目が施されている。（15〜17）。W区の瓦溜り中には含まれていないが，S－5区第12層中で検出したもの（13，14）には縄目が施されている。

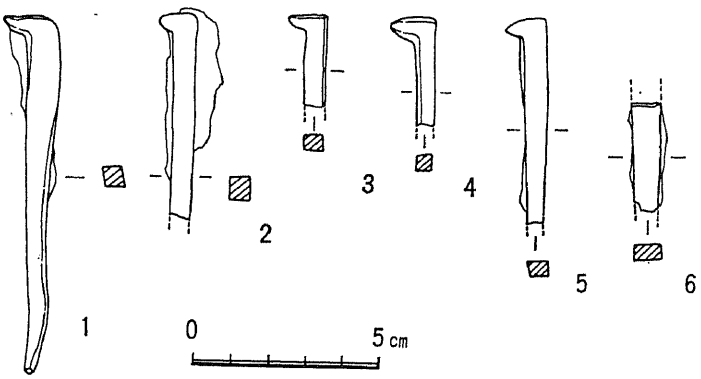
以上の様相からみて，大きく2種類がみられる。彫りの深いもの（1〜4）と彫りの浅いもの（5〜12）があるが，前者は鎌倉時代以前，後者は鎌倉時代後半〜南北朝初期と考えられる。S－5区第12層で検出された平瓦は瓦溜りの瓦に先行するが詳しい年代はわからない。



第18図　W－2区出土瓦実測図

3 鉄　　釘

調査区域中で角釘が出土している。小破片は除いたが，E－3区灰色土層中で3本（4～6）E－4区第3層で1本（3）W－2区瓦溜中で1本（2），「鐘楼跡」周辺の清掃中に1本出土している。いずれも角釘で頭部を一方に折り曲げている。



第19図　鉄釘実測図

Ⅳ 「鐘楼跡」について

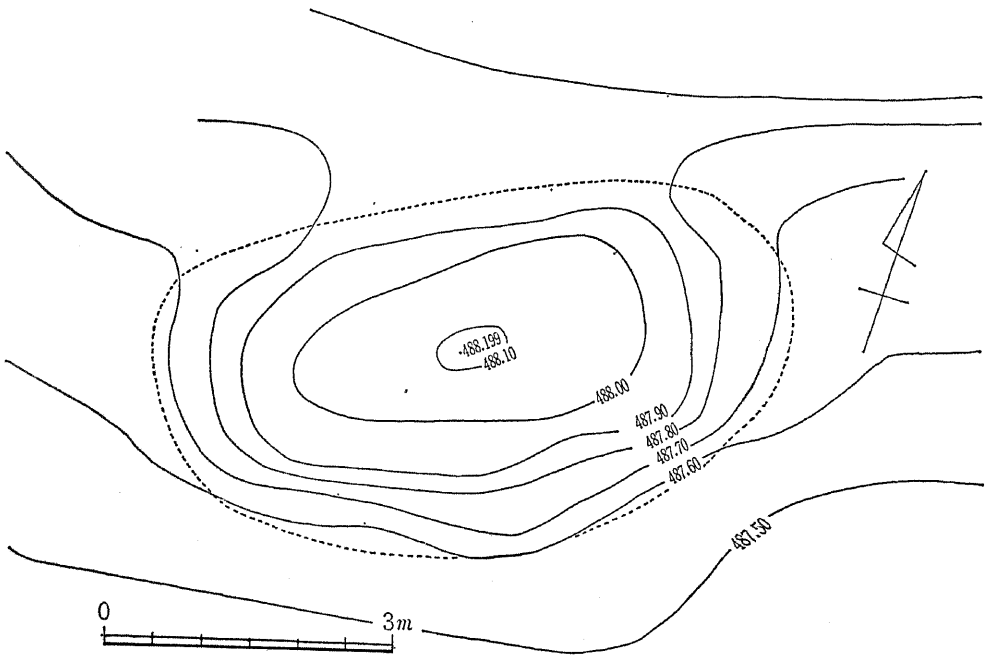
「鐘楼跡」と呼ばれていた部分について検討する。上面を清掃すると，石材は2つの方形が認められる。やや小さな石材を用いた西よりの方形は，聞きとり調査によって戦後まもなく石積遺構のよう拝所がつくられた際の基礎であることがわかる。これはS．25年に梅原末治博士らの調査にかかる時までには，猿田彦神社の方に移転して残存していなかったことになる。

やや大形の石材を使用した方形の基礎はそれ以前のものであることは確認された。しかし，何時までさかのぼることができるかどうか決めがたい。トレンチ調査の結果によると第2層の上に石材が位置し，この層位には西の瓦溜りと同じ瓦片を含んでいて，建物が存在した時期以降であることがわかる。

Ⅴ　墳状遺構について

史跡地内の草刈り作業によって石積遺構の東側平坦地北端に土盛りが確認された。そのため，除草を完全に行い，写真撮影と10cmコンターで平板実測を実施した。形態はやや楕円形を呈し，低いマウンドである。周辺部は北がやや高くなり，その他は南に向かってゆるやかに傾斜している。規模は長径 6.5m，短形 3.6m，高さ 0.6mである。表面観察では時代も遺構も不明だが，経塚か墳墓などが想定される。

（文責・正岡　睦夫）



第20図　墳状遺構実測図

第五章　石積遺構分布調査

Ⅰ　はじめに

国指定史跡である熊山山上石積遺構は，江戸時代以来，唐僧鑑真開基の伝承をもつ，帝釈山霊山寺に付属する「戒壇」とされてきた。[(1)〜(5)] もっとも，昭和以後いろいろ新説も出されているが，ここでは触れない。そして，山上他の峰々にも類似石積遺構の存在することが指摘されてきた。たとえば，沼田頼輔は「小規模なものを加えるとその数９個の多きを数える」といい，[(4)] 荒木誠一は指定石積を含めて第７号までの分布を記述するとともに略図を掲げ，すべて戒壇としている。[(6)] さらに大本琢寿は，守時桂太氏所蔵の古版木から摺ったものとして掲げた一文の「戒壇四十八谷数四十八……」を紹介し，別掲の地図に「壇築遺跡」７号までを載せている。[(7)] 近江昌司は「熊山には第２章に述べた（注・国指定の）石積遺構のほかに同様な小遺構群が散見していることが知られている。しかしその数量や実体について報告されたものはないようである」として，諸資料を紹介するとともに，地元の調査では「熊山の北半分（熊山町の行政区域）においては６群以上30基を越え，そのうちのあるものは北方山裾に至るまで造営されていると云われる。ところが筆者の短日時における粗野な踏査ではあったが，確実なところ２基の小遺構を見出すことが出来たにすぎない」とした。[(8)] 近江の掲げた第１図（遺跡附近地形図）での小遺構分布[(8)]には，不充分な点が認められるので，以下今回の分布調査での個々の所見を述べるとき，荒木の資料ともども比定していきたい。

これら石積遺構について，戒壇説のほか，経塚説・特殊造塔説・修験道関係遺構説・高僧墳墓説など多くの説が，記述されたり語られたりしているが，以下分布調査結果を公表し，研究の用に供したい。

このたびの分布調査は，日程や経路の都合とか，見落とし分についての追加調査などにより，同一地区内での調査番号が不ぞろいになったのはやむをえなかった。その通し番号は原則として各遺構の北東隅に立てた赤杭に記入し，今後の調査・見学に便した。また一応番号を与え，杭を打ったものでも，調査終了後，調査担当者全員による検討の結果，除外すべきもの，参考に留めるべしとされたものは，以下の記述において欠番となったり，あとに一括したりしてある。

なおこの調査に当たっては，あらかじめ諸資料によって地点を推定したり，地元古老の知見にもとずく案内によって踏査し，その途次偶然に発見したものを含めた。また古老が「ここには絶対にない」と断言する尾根や谷についても，可能な限り歩いて，存在しないことの確認に努めた。しかしながら，まだまだ知られない遺構が，知られない地点に落葉腐植におおわれて存在する可能性は，充分あるといわねばならない。また，多くの遺構が原状をほとんど留めないほど破壊されているため，採択・参考・除外の分類にも，確信のもてないものがある。今後研究者の調査にまつところ大である。

〈注〉

(1)熊山町奥吉原・薬王寺宝生院蔵「天和３年（1683）６月20日付書上」

(2)大亮軒「和気絹」宝永６（1709）

(3)松本亮之助「東備郡村誌」元文２（1737）

(4)沼田頼輔「備前熊山戒壇遺跡考」考古学雑誌15巻６号・大正11（1922）

(5)永山卯三郎「岡山県通史（上巻）」昭和５

(6)赤磐郡教育会「改修赤磐郡誌」昭和15

(7)大本琢寿「熊山雑記」吉備考古86号・昭和28

(8)近江昌司「備前熊山仏教遺跡考」天理大学学報第85輯・昭和48

Ⅱ　各遺構の概要

※遺構名（*No.*）は調査番号＝赤杭番号

A　熊山神社境内地区

1. 熊山神社境内１号（国指定史跡石積）

熊山神社の南石段登り口から南へ約 200m行くと，そこから東と西へ各約 100mのびる，細長いほぼ平坦な台地が広がっている。この一帯が国指定史跡であり，その西端近くに３段の石積が見られる。露出した巨大な岩盤上に，割石をもって一辺約11.7mの方形基壇（岩盤が最も低い南東隅での高さ約90cm）を造り，その上に１段目として一辺約 7.7m，高さ約１m，２段目一辺約 5.2m，高さ約 1.2m，３段目一辺　約 3.5m，高さ約 1.2mの方形石積を築造している。２段目の四面中央には龕が造られていて，その高さは65～90cm，幅62～73cm，奥行90～ 136cmである。石積の中央は竪穴の空洞になっていて，上を大きな蓋石でおおっていたもののようである。

昭和11年８月23日，熊山南麓香登の南方，鶴山丸山古墳が盗掘され，30余面の鏡や見事な石枕，玉類などが出土したことが近隣人士を刺激し，本石積も翌昭和12年９月23日，西側から盗掘を受けた。そのとき５部分組み合わせで全高 1.6mに達する特殊筒形須恵器と三彩小壺，それに，皮のように見える文字の書かれた巻物様のものが出土したという。三彩は郷土史家水原岩太郎氏が 100円ほどで入手したが，後年行方不明，筒形須恵器はいったん相生市那波の古物商が80円くらいで買取り，その後水原氏の手を経て，現在天理大学の所蔵となっている。巻物様のものは故小橋藻平氏が蔵していたが現在は不明である。前二者については，Ⅰの注に掲げた，吉備考古86号と(8)の近江論文に詳しい。

B　竜神山地区

1. 竜神山１号＝行者様（No.１）

吉井川にかかる南熊山橋東詰から熊山山上への登山路の中間点あたり，竜神山三角峰の北西に位置する双

こぶ状小丘の南丘頂に立地する。やや平坦で岩盤が露出し松林となっている。平石を立て並べてU字形にし，その内側にも同様コの字形に囲み，中央には石をもって祠を載せる台座を造っている。この祠にはかつて一本歯の下駄をはいた木像が置かれていて，行者様として信仰されていたという。外の石列北西隅には，豊島石製の一祠が置かれ，中に二本歯の下駄をはいてしゃがんでいる，おそらくこれも行者の小石像がある。

これは無論，現状を石積遺構ということはできないが，石材の形状・大きさ・数量などとともに，立地場所その他から考えて，かつての石積の二次的転用と推定した。

C 南山崖（みなみさんがい）地区

国指定石積から真西へ 620～ 630mの所を頂とするゆるやかな一峰が南山崖で，南から南西にかけて，標高 370～ 380mあたりから下は断崖絶壁となっている。

1. 南山崖1号（№2）

南山崖頂上から，真南方向よりわずかに西へ振って，上述の断崖直上に，千畳岩（畳岩とも）と呼ばれる東西30余mの巨岩がある。その巨岩南縁と断崖との間にある，わずかばかりの緩斜面に立地。国有林境にある。

小形割石をもって，内部に空洞を意図したように積み，その上に 1.5m× 1.1mの平石を載せたもの。平面ほぼ方形と見てよい。地元瀬戸町在住の土井秋夫によれば，かつてこの蓋状石の上に小石をもって小さな壇が造られており，当時の写真も持っているという。

2. 南山崖2号（№39）

南々東端，千畳岩の東方，大谷山方向へ舌状に突出する三方急崖の小尾根のつけ根，やや平坦な所に立地。国有林の境界を示すコンクリート赤杭№ 197を立てるため転用されている。杭を立てた部分は新しい土石をもって埋めているが，外周の石は小形ながら石積遺構の原形をわずかに留めるものと思われる。

3. 南山崖3号（№3）

千畳岩から南山崖頂上へ登る中間やや下寄りの斜面，雑木林に立地する大規模な3段石積遺構。第1段の南つまり谷側には，高さ 1.5mくらいの石垣を東西20m近く築き，土留あるいは基壇の役を負わせているようである。流紋岩質の石材は比較的大きく，板石もあるが不整形のものが多い。2段目には竈を設け，北面と東面のものが遺存している。この3段石積遺構は，規模・形式とも山上のA_1（国指定）とほとんど同様であるが，戦後盗掘によりいちじるしく破壊されてしまった。蓋石に使用されていたと思われる，大きな板石も残存している。

本遺構が荒木誠一の掲げる2号戒壇であることは疑いなく，[I(6)] 当時南面のみ破壊されているように略図

が描かれているのに，現状はもっと大きく，西面にまで破壊が及んでいる。

盗掘よりずっと遅れて上記土井秋夫らが実見したところによれば，中央空洞部の底には拳大の円礫が多数見られ，その礫間より須恵器1片を採集した。それは径10cmたらずの底部片で無釉，断面四角形の高台がついていたという。この破片は実見当日土井の手を離れ，以来その所在が不明である。

4. 南山崖4号（No.4）

南山崖頂上の平坦な雑木林中に立地する。いちじるしく破壊されているが，2段がほぼ確認できる。第1段の外側に，基壇かとも思える石材の遺存が認められるが確かでない。長方形のやや大きい石材もあるが，小形のものが多い。中央部には蓋石に使用されていたと思われる大形の石材があり，中央に空洞部を設けていたものと思われる。

前記荒木のいう第3号戒壇である。

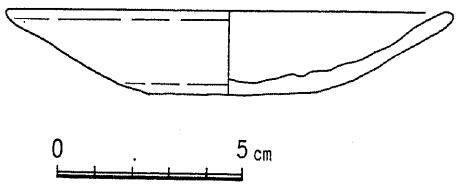
5. 南山崖5号（No.5）

南山崖頂上から北々東方向へいったん降り，再びゆるやかな登りになった，狭い尾根の中間に立地する。1段のみ原状をわずかにうかがうことができるもので，やや平たい石が数個遺存している。

荒木のいう第4号戒壇あたりの位置にあるが，状態と規模はまったく異なり，しかも付近にそれらしいものは見当たらない。

6. 南山崖6号（No.40）

南山崖北端，すぐ北辺は削去されて，弓削部落から熊山山頂方面へ通ずる俗称権現道となっており，経盛山と南山崖のあいだ大坂峠（たわ）のすぐ西にある。狭い尾根上のほぼ平坦地に立地し，東西約4m弱，南北約2m強の範囲に，流紋岩質の石材多数が集中的に乱在し，原形を留めない。



第21図　南山崖6号（C_6）出土土師器実測図

D　経盛山（清盛山）地区

南山崖頂上から北へ約 400m，標高 510mという熊山山塊の最高峰である。

1 経盛山1号（No.8）

頂上独立標高点の南約10m余の平坦地に立地する。山道に接する2段積みである。全石材がほとんど残存するが，全面的に少しずつ動いていて，各段四方とも原面はつかみ難い。中央にほぼ円形の凹み穴が見られ

る。

上記荒木の記する第6号戒壇であるが，荒木の図では3段積みとなっており，現存する2段をその1・2段としても，2・3段としても計測が合わない。しかし状況から考えて荒木の示す1・2段が残り，3段目が消滅したと見るべきであろう。

2. 経盛山2号—櫛名田比売（No.13）

山頂から前記大坂峠へ向かって，半ば近く降りた南東尾根中腹に立地する。かなりな斜面に岩盤の露頭があって，その上に石積を造っている。中央部がとくにいちじるしく破壊されているが，全面的に崩れていて，原状を推定することはできない。

Ⅰの注(8)で，近江昌司が「推定南山崖遺構」とした遺構である。また荒木が第5号戒壇としたのは，位置からしてこれではないかと思われる。

3. その他参考地

（No.44）2号の西方，頂上への山道の北に接し，南東へ下降する尾根上斜面に立地。谷側にほぼ二辺が認められるが崩壊がいちじるしい。山側は埋没しており，付近に1m前後の大石が散乱している。

（No.45）No.44の北，同様の立地である。1m前後の自然石数個が点在する間に，20cm前後の石材が集中的に乱在する。

（No.46）2号の下方，かなり急な斜面に，小さな割石が多数集中的に崩落しており，荒木のいう第5号戒壇はこれであったかもしれない。

E　風神山地区

熊山神社から西へ，経盛山に向かってのびる尾根（最高 499m）が風神山である。

1. 風神山1号（No.6）

経盛山との中間鞍部が，経盛山・熊山へ通ずる山道と，北西の勢力部落から登ってくる山道との，三差路になっている地点の東約10mに位置する。雑木林の緩斜面に立地する。

かろうじて2段築成が認められるていどに荒れ崩れている。付近にも流紋岩質の石材が散乱しているが，基壇とは認め難い。石積中央部には，かつて空洞を作っていたように見える。

前記荒木誠一が第7号戒壇としたのはこれである。また，近江昌司が「8mほどの間隔をあけて位置している」2基の「小遺構」としたひとつが本遺構であろうと思われる。

2. 風神山2号（No.7）

1号の10mほど上の斜面に立地。明らかに石積遺構であるが，石材はかなり動かされている。中央部に竪

穴状空洞部の痕跡と思われる凹所が，ほぼ円形に見えている。外周は方形平面であったかどうかもわからないほど荒れ，かなりの巨石が散在しているが，自然石かどうかも不明である。

近江の述べた2基の隣接する小遺構のひとつと考えられる。

3. 風神山3号＝鍛冶神様・鍛冶大明神（No.12）

風神山から南西へのびるふたつの小さい舌状支丘のうち，東側の尾根の南端近く，ほぼ平坦面に立地する。石積の石材はすべて動かされ，平面コの字形に積み変えられており，その中央に方形の台座を積んで小祠を据えている。コの字区画内にも多数の平石が敷かれていて，大形のものは70～80cm長に達する。

鍛冶大明神は，中世以来熊山南方の刀工たち（長船など）の尊崇篤く，祭礼時には参拝のため長蛇の列が続いたという。カマ・ハサミ・ナタ等が奉納されている。

F　南の峰地区

国指定石積（A1）からほぼ南へ向ってのびる尾根が，ほぼ直角に西へ折れて大谷山へ向かおうとする所が南の峰である。その北西斜面は大谷の急崖に落ち，東は香登（かがと）部落から北へ深く刻まれた美音（みおん）谷である。

1. 南の峰1号（No.20）

美音谷の谷頭近い奥山池から南の峰へ向かって，国有林の境界が走っているが，その線上最低位の斜面に立地。奥山池の提防を西へ1.5倍ほど延長した地点にある。石材はその境界杭No. 262に転用されている。

小形1段の石積で，石材は小さい流紋岩質である。現状が本来のものか，境界杭を立てるのに積み変えたものか不明である。

2. 南の峰2号（No.21）

前記境界線上，1号の南西にあり，南東方向へ張り出した尾根の頂上から100mほど下がった斜面に立地している。境界杭No. 259を中心にして，大形の割石をもって築造しているが，大きく破壊されている。境界より南へ約2m突き出た所に，1段目かとも思われる乱れた石列があるが，断定し難い。

3. 南の峰3峰（No.42）

南の峰頂上から北東約180mに一峰があるが，頂上から南々東に下がる尾根上に2基の遺構がある。

竜神山1号，風神山3号と似た遺構で，コの字形に積まれており，横穴式石室かと見まがうように積み方は整然としている。方形石積を転用したものか，一次的別遺構かは確かでない。つぎの4号のすぐ南（下）に位置する。

4. 南の峰4号（No.43）

3号の北，頂上部に立地。一辺推定約2.8mの方形である。中央部に平面円形の凹所がある。周辺に石材

が散乱している。

5. 南の峰5峰（No.9）

3・4号のある小丘の北，山道の西側に緩かに盛り上がった雑木林中に立地する。全面的に崩れ，原状推定はできない。石材はやや大きく，もと1段積みであったらしい。

6. 南の峰6号（No.23）

5号から西方大谷へ向かってのびる舌状小丘の南側に立地する。1段積みと推定されるが，石材がかなり散乱していて，本来の規模・構造は不明である。

7. 南の峰7号＝美音院跡（No.22）

南の峰山頂（426.9m）よりやや北，斜面に立地する大規模な石積遺構である。国有林境界杭を立てるのに石材が転用されている。もと2段まではほぼ推定できるが，多くの石材が北東と北西（谷側）に転落散乱していて，3段であった可能性もある。南（山側）はわずかに上から土におおわれ，段積みをうかがいえない。

昭和3年11月に盗掘され，径約30cm余り，2本つなげる先細り円筒状須恵器の上に，国指定石積から出土したのとそっくりの，火焔状ヒレ飾りのある蓋をもつ，計1mほどの経筒様土器がこの付近から持去られたという。当時実見した古老の談である。なお，本遺構の東に隣接して3基の石積がかつて存在したそうである。

8. 南の峰8号（No.32）

7号より南へ約50mの山頂，美音院跡の南西端に立地。一辺3.2～3.4mと推定されるが，内部に散乱する石材は少なく，10余の石は国有林境界杭No.254を立てるのに転用，積み変えられている。中心部地面に盗掘壙かとも見える凹所ができている。

9. その他考考地

（No.41）　3号の南（下）に，大形の石材が散在しており，その下に小形割石が散乱している。斜面がかなり急で，独立の石積であったか，3号の石材の転落なのか不明である。

G　大谷山地区

1. 大谷山1号（No.11）

南の峰の真西約500mに位置する鐘状峰が大谷山（401m）で，その山頂平坦面の西寄りに立地。方形1段積みで，国有林の境界に利用されている。原状のままにしては整いすぎている感があり，二次的に積み変

えた可能性もある。周辺にもかなり多くの石が散乱しているほか，岩盤の露頭も見られる。

H　高津山地区

1. 高津山南 1 号（No.33）

美音谷をへだてて南の峰の東にある峰が高津山で，頂上から南々東方向，油滝神社下社を経て送電鉄塔の南約 150mの尾根上に立地する。約20個の石材が遺存し，最大のものは一辺 2.5mもある巨石を用いている。西面で 2 段の原状をうかがうことができる。なお，本遺構のさらに南約20m地点にも石材の集中が見られる。

I　山頂三角点地区

1. 山頂三角点 1 号（No.18）

一般にいう熊山山頂で，電々公社の中継アンテナ塔敷地の南に残されている，ほぼ平坦地にある。508.61mの三角点の南 5 mに，長さ約10m幅約 6 mの巨岩を基盤に利用し，10～40cmくらいの石をもって石積を造ったもののようであるが，現在は完全に崩落散乱し，西方巨岩外へもかなり落ちている。巨岩の東側には，石積の蓋に用いたものかもしれない大形の石が傾落している。

古備前焼（鎌倉期か）と思われる土器片数片を採集した。

J　尺八山地区

頂上三角点の東約 700mにある一峰が尺八山である。

1. 尺八山 1 号＝院の墓（No.29）

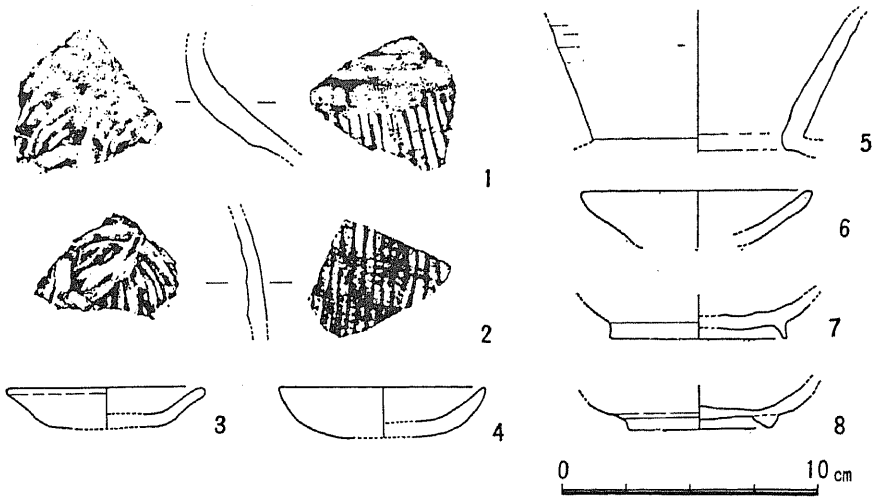
尺八山頂から南西約 300m，南へのびる小尾根上に立地。径30～40cmほどの石材が使用されているが，中央部が地山まで盗掘？破壊されているため，本来の形状・規模は推定し難い。

盗掘？壙内部に，須恵器・土師器の破片が，地山直上に散乱していた。須恵器は内面にもタタキ目をもち，平安以前と推定できる。土師器は高台のつくものがあり，年代観は平安後半～鎌倉時代と考えられる。

2. その他参考地

（No.28）尺八山頂上から南々東約 300mの尾根上，山道のすぐそばにある。一辺約 1 m，1 段積みで，かなり大形の石を用いて方形に造っているが，境界石の可能性もある。

（No.27）大滝山福生寺の 500mほど北へ，尺八山の裾が張り出した台上に立地。送電鉄塔のある平坦部の北西端に位置する小形の石積である。中央にコンクリート境界杭が立ててある。石材は70～80cmに達するものもあり，原状が保たれているのか，二次的工作かは不明である。



第22図　尺八山1号（J₁）出土遺物実測図

K　獅子が谷地区

備前市大内から大滝山福生寺を経て，曲折しつつ北上してきた大滝林道が，標高 400m近くで大きく西へ曲がったあたりが，熊山山上東半部と西半部を分ける地点である。ここから 200mたらず東へ行くと 425.5 mの三角点があり，その南の谷が獅子が谷である。

1. 獅子が谷 1 号（No.36）

三角点から南々西へ下る尾根上，標高 390m余の地にあり，大本琢寿が「福生寺上」とし，地図でその位置を誤っているものである。

古老談では，10数年前までは高さ約1 mの石積であったという。現在，長辺1 m強の大石と多数の角礫が散乱し，本来の形状・規模は不明である。

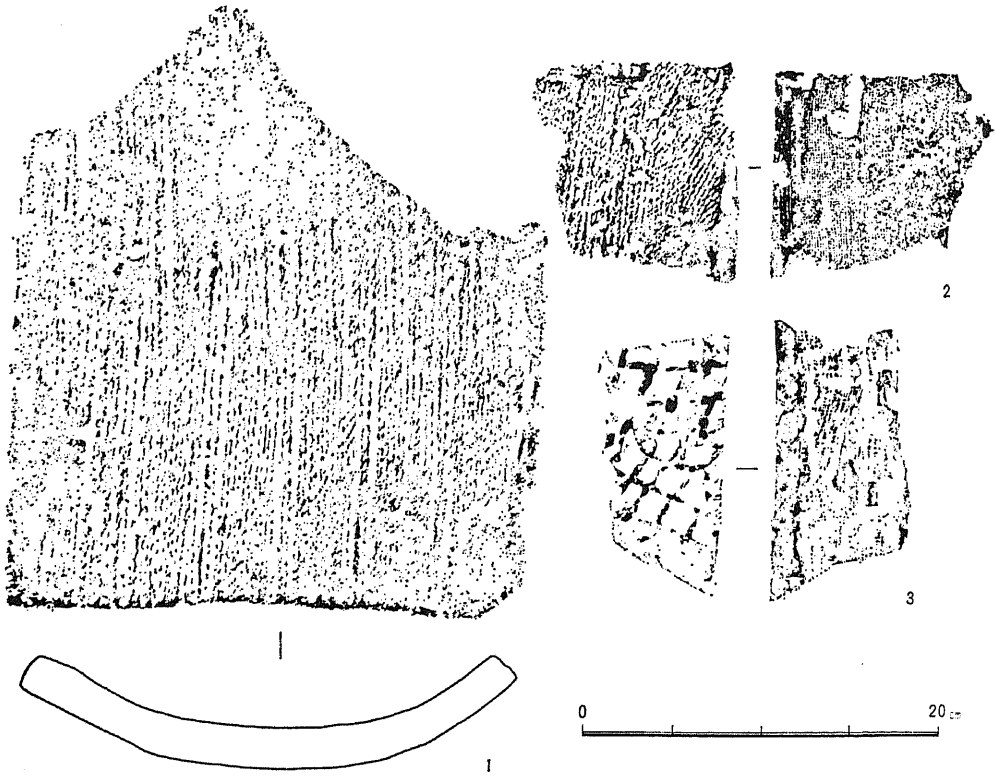
2. 獅子が谷 2 号（No.37）

1 号より北東へ約 5 mに位置し，一辺推定 3 mの石積で破壊はげしく，基礎に利用した大形割石により規模を推定できるだけである。それら大石の間に20～30cmの角礫多数が散在している。10数年前までは1 号同様，高さ約1 mの石積だったという。

3. 寺院跡および経塚？（参考）

前記三角点の南東緩斜面に布目瓦（奈良末か）・須恵器・土師器の破片が散乱し，もとの礎石かと思われる石が散見される。

三角点北側の雑木林中に経塚かと思われる遺構がある。径約４ｍ，高さ約60cmの円墳状で，周を囲むように石材が配置されている。



第23図　Ｋ地区寺院跡出土瓦

Ｌ　舟下山地区

熊山山頂三角点の北々東，山上東半部の西端から，熊山町奥吉原へ向かってのびる一大支峰が舟下山である。

1. 舟下山１号一犬塚（No.16）

舟下山の南西側につながった，北西から南東へのびる細長い一峰がある。その頂上よりやや南へ下がった所に位置する。板場池の堤防北詰めを登った所である。

方形２段の石積で，中央部の石材は掘り取られてまわりに積み上げられ，穴は地山も掘り下げられている。流紋岩質の石材は不整形で大小さまざまであり，大は長さ80cmに達する。盗掘壙には７～８年たったと思われる小松が生えている。

Ｍ　烏帽子（えぼし）岩地区

Ｊの尺八山東方約 2.5km，標高 350mの一峰である。

1. 烏帽子岩１号（№48）

岩より東へ約 100m，三角点の付近にかなりの巨岩があり，その上に石材が方形を推定できる形に並んでいる。石積の上部はほとんど転落しているようで，巨岩の西側や南側に石材が数個ずつ散乱している。巨岩上に残っている石の高さは20～25cmくらいである。

N　山上でのその他の参考地

（№17）山頂三角点の北々西，熊山池の北東にある小峰頂より，やや北に下がった平坦地に，大小多数の石が散乱している。遺構と断定できるものはないが，石群が東西約10m，南北５～６mにわたって集中しているのは，この小丘上，他では見られない。

（№38）　熊山神社の北西にのびる双頂峰（雲上山）の北峰から，西へ張り出した尾根上に立地する。小形であるが整いすぎの感もあり，石積遺構か，小祠の台座かは断定し難い。

（№47）　ほぼ熊山山上東端近く，和気町大中山の観音谷に北面して，巨岩中腹に浅い洞穴がある。南西隅に石を積んだものがあるが，観音堂という俗称から，観音菩薩を祀ったものであろう。

O　低位における石積遺構

A～Nはすべて，標高 350m以上の熊山山上に分布しているが，ずっと低い地点にもいくつかの石積が見られる。

1. 千躰（せんだ）・行人山（ぎょうにんやま）（№14）

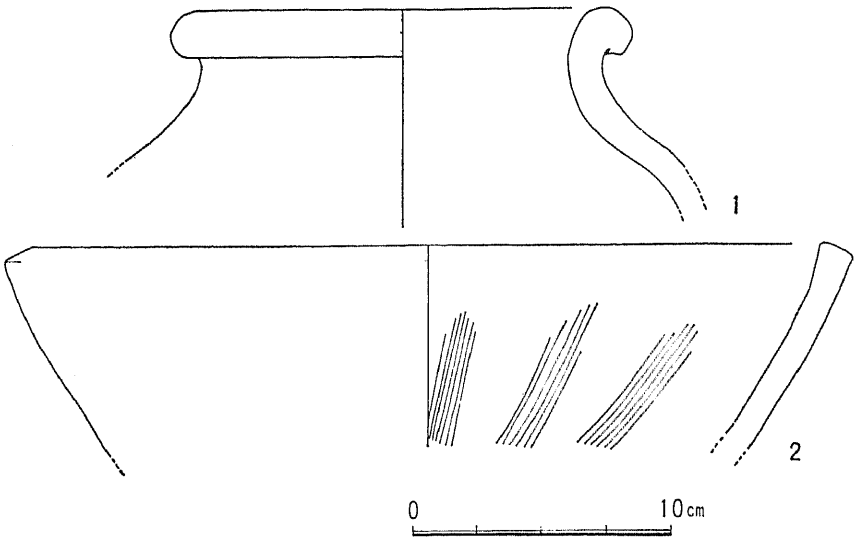
山陽本線熊山駅の真南約１kmの滝尾山から，北に向かって張り出した急峻な一小峰が行人山である。頂上（121.5m）の狭い平坦地に割石をもって２段に積まれている。１段目に比して２段目はやや高く，しかも現状では角錐台に近い。１段目の上面は，三方が幅20cmであるのに北側のみは40cmで，この上に瓦質の小祠破片が遺存していた。

中心部から北西にかけて，２段目が盗掘で破壊され，そこに１枚の大形平石が傾落しているが，蓋石か，３段目代用であったか，祠の台座であったかはわからない。全体として原形そのままでなく，修復または変形を受けているようである。

2. 千躰・明人山（№15）

熊山駅のすぐ東が明人山（153.6m）で，山頂から部落方向へ南西微西に下降し，亀池下の小池に向かう尾根上，標高約75mの緩斜面に立地する。南山崖６号と同様，全面的に破壊しており，ほぼ３m四方内に流紋岩質の小石多数が集中して折り重なっている。付近にも石の散在が見られる。

中心よりやや下と，石群から谷側へ数m降りた地点とで，古備前焼（鎌倉期か）スリバチ片とツボ（カメ？）片各１を採集した。



第24図　千躰明人山(O₂)出土備前焼実測図

3. 坂根竜神様（No.25）

熊山山塊の南西裾近く，吉井川のすぐ東岸に，大谷山から下降する細長い尾根が，二の樋部落のすぐ北で逆Y字形のふたまたに分かれた，西尾根上の最高地点に位置し，松の疎林となっている緩斜面に立地。標高わずか80余mである。1段のみであるが，原形をほとんど残さず，西側に少し離れて基壇か，もとの1段目の一部かとも思われる石列がある。

この場所は，往時雨乞いに利用されて竜神を祭り，東側の平坦地で千貫焚きをしたというから，石積が2次的に動かされた可能性も大きい。石材は，付近にほとんど見られず，ここに集中し，しかもここの石も砂防工事用などに持去られているそうで，残る石は少ない。中央に蓋石を思わせる大形の石が置かれている。

4. 香登（かがと）宮山（No.26）

香登西部落の北方，城山池を経て森ノ木川の西斜面，山道に接して松林・ブッシュの中に立地。北西部は崩土に埋没して確認できないことF₇と似ている。きちんと積まれた1段のみ残っており，上部の石は城山池の堤防工事に転用したとのことである。一時毘沙門天を勧請したというから，そのとき手を加えた可能性もある。

見晴らしの悪い，深い谷の中にあり，背後が急斜面でもあるので，地元が昭和4年8月に石積遺構の分布調査をしたとき正式登録せず，参考に留めたという。

5. その他参考地

（No.31）備前市大内から大滝山福生寺へ向かう舗装道路の途中，クレー射撃場の西側斜面に，戒壇塚と呼

ばれる石積があったという。昭和30年ごろ，国道２号線を改修したとき，ここの石材を利用したそうである。２段の方形に積んでいて，高さは１ｍ弱であったというが，遺存する石はわずかである。

（№30）大内部落の西，大内山の東麓の，北と西に山を負い，東と南が開けた地が香登廃寺である。この北東，尾根端部に位置している。傾斜の変換点にあり，山道に接している。長さ40～50cmの石を２段に積んだものが，50年ほど前に残っていたという。石材は宅地造成などに持ち去られ，現在10個ほどが残るにすぎない。

（№34）　香登廃寺の北西で，現在アパートが建っている北西端にある。かつて，高さ60～70cmの２段の石積があったというが，現在は一辺約 2.6～ 2.7ｍの石列が残存するのみで，中央部は自然層まで掘られている。

※　香登廃寺南方の水田（かつての寺域内）に高さ３ｍをこす円墳状の土塔らしい草山があって，明治４年の絵図には「戒壇」と記入されているが，国道２号線工事の土取りのため消滅したという。

Ⅲ　調査を終えて

以上，３ヶ月で調査した48遺跡のうち，４（№10，19，24，35）を除外し，国指定石積を加えた45遺跡についてその概要を述べた。45のうち，不確実だとして参考に留めたもの12を差引くと，確実・ほぼ確実とした遺構は33となる。なおこれ以外に，地元古老の談によって，かつて確実に存在していたが，池の堤防や道路工事などにより消滅したと推定できるもの数基を数えることができる。これら遺構群の分布を大きくまとめてみると下表のようである。

付表1 石積遺構分布状況

	山上西半部	山上東半部	低位のもの	計
確実・ほぼ確実	25	4	4	33
参　考　地	8	1	3	12
計	33	5	7	45

圧倒的に山上（ほぼ標高 350ｍ以上）西半部，とくに，西側からえぐり込んだ大谷の急崖をめぐる，南の峰から南山崖にかけての一帯に集中的である。つぎに全体的特徴をまとめてみよう。

1　規模と形状

現状において，１段目の一辺がほぼ５ｍ以上と推定できるものは，A_1（国指定）・C_3（№３）・F_7（№22）・D_1（№８）・L_1（№16）・O_4（№26）の６遺構である。A_1・C_3・F_7 の３基は，大谷を眼下にほぼ正三角形の頂点のように分布しており，D_1 はC_3 の北方最高峰の頂上，L_1 は山上東半部に遠く離れ，O_4 はずっと低位（標高 110余ｍ）の深い谷にある。またA_1・C_3 は３段で，２段目四面に龕

をもっているが，他の全石積は，現状で3段と推定できるものはなく，1—2段で，龕をもつものも見当たらない。荒木誠一は，C_4（No.4）・C_5（No.5）・D_1（No.8）・E_1（No.6）をすべて3段とし，細かい計測を記入した略図を掲げているが，[I(6)] 現状では確かめようもない。大形6遺構以外の，原寸を推定できる石積は，一辺3～4mていどの中形，2～1mの小形である。大部分の石積が破壊または変形されているので，全体の傾向を述べることはできない。

2 遺　　物

遺構の性格に迫るための重要な手がかりのひとつ遺物は，急いだ分布調査の上ではほとんど発見できなかったが，検出した，あるいは検出したといわれるのはつぎのとおりである。

〈須恵器〉　A_1（国指定）・C_3（No.3）・F_7（No.22）・J_1（No.29…土師器も伴う）

〈古備前焼〉F_3（No.42）・I_1（No.18）・O_2（No.15）

なおこのほか，C_6（No.40）からも若干の土器が検出され，また個別の記述で触れたように，K地区からは，須恵器や奈良後半と考えられる古瓦が出土している。

3 立　　地

全遺構について築造の立地を調べると，その大部分が眺望のよい山頂，または尾根上の斜面にあるが，いっぽうで眺望はかならずしもよくはないが，山上より八方へ通ずる登山道の分岐点など，交通上の要地に立地するものもある。C_6（No.40）・E_1（No.6）・E_2（No.7）・O_3（No.25）・O_4（No.26）などがそれである。

また，A_1（国指定）をふくめ，自然の大岩盤ないし巨石の上に築造されたものもかなりあった。

4 遺構の破壊と、保護の必要

すでに述べきたったように，ほとんどの遺構が大破されている。自然崩壊もいくらかはあるのであろうが，その多くは溜池の堤防や道路・砂防工事等への持去であり，国有林境界への転用であるが，石材の多くを残しながら，中央部が大きくうがたれているものは明らかに盗掘である。昭和11年の鶴山丸山古墳の盗掘がきっかけとなって，A_1（国指定）が盗掘されたことはすでに述べたところである。以来盗掘は断続的に行なわれたらしく，荒木誠一の略図[I(6)]と比較しても，該当遺構の面影もない現状である。大戦後の盗掘についても耳にしており，これ以上破壊を見過ごすならば，これら遺構群の性格を明らかにすることはますます困難となろう。

例えばA_1（国指定）と同規模のC_3（No.3）つまり南山崖の巨大な石積遺構などは，町の指定すら受けていない状況である。また，他の遺構群も，たとえ小形であろうとその分布に重要な意味があるわけであるから，これらについても転用・変形することのないように，充分配慮しなければならない。

幸か不幸か，大部分の遺構が国有林内にあるわけで，その気になりさえすれば，保護保存は民有地内よりもはるかに容易であろうと思われる。全国的に類例のきわめてまれな，本遺構群の充分な保護を願ってやまない。

（文責・角田　　茂）

付表２　熊山山塊石積遺構群一覧表

※　確度のうち△は参考，×は除外，他はほぼ確実

記号番号	名　称　（調査番号）	所　在　地	段数	1段1辺	確度
A 1	熊山神社境内1号　（国指定）	熊山町奥吉原，熊山	3	7.7 m	
B 1	竜神山1号＝行者様　（No.1）	瀬戸町弓削，畑	?	?	
C 1	南山崖1号　（No.2）	〃　〃　赤石	1?	1.5?	
C 2	南山崖2号　（No.39）	〃　〃	1?	1.6?	
C 3	南山崖3号　（No.3）	〃　〃	3	7.6	
C 4	南山崖4号　（No.4）	〃　〃	2?	4.5	
C 5	南山崖5号　（No.5）	〃　〃	1?	2.1?	
C 6	南山崖6号　（No.40）	〃　〃	?	?	
D 1	経盛山1号　（No.8）	瀬戸町弓削赤石 熊山町勢力	2?	5.5	
D 2	経盛山2号＝櫛名田比売（No.13）	熊山町勢力，内御浦	1?	?	
	（No.44）	〃　〃	1?	?	△
	（No.45）	〃　〃	?	?	△
	（No.46）	〃　〃	?	?	△
E 1	風神山1号　（No.6）	瀬戸町弓削，赤石	2?	3.1	
E 2	風神山2号　（No.7）	〃　〃	1?	?	
E 3	風神山3号＝鍛冶神様（No.2）	熊山町奥吉原，熊山	?	?	
F 1	南の峰1号　（No.20）	備前市香登，　奥谷	1	1.4	
F 2	南の峰2号　（No.21）	〃　〃	1?	?	
F 3	南の峰3号　（No.42）	〃　〃	?	?	
F 4	南の峰4号　（No.43）	〃　〃	1?	2.8?	
F 5	南の峰5号　（No.9）	瀬戸町弓削，　赤石	1?	2.7?	
F 6	南の峰6号　（No.23）	〃　〃	1?	?	
F 7	南の峰7号＝美音院跡（No.22）	備前市香登，　奥谷	2?	4.8?	

記号番号	名　　称　　(調査番号)	所　　在　　地	段　数	1段1辺	確　　度
F 8	南の峰8号　　(No.32)	備前市香登，　奥谷	?	? m	
	(No.41)	〃　　〃	?	?	△
G 1	大谷山1号　　(No.11)	瀬戸町弓削，備前市香登	1	1.2	
H 1	高津山南1号　　(No.33)	備前市香登，　奥谷	2?	3.0?	
I 1	山頂三角点1号　　(No.18)	熊山町奥吉原，保々呂	?	?	
J 1	尺八山1号=院の墓　　(No.29)	備前市大内，　熊山	?	3～4	
	(No.28)	〃　　大滝山	1	1.0	△
	(No.27)	〃　　〃	?	?	△
K 1	獅子が谷1号　　(No.36)	備前市伊部，　奥山	1?	3.4?	
K 2	獅子が谷2号　　(No.37)	〃　　〃	1?	?	
L 1	舟下山1号=犬塚　　(No.16)	熊山町奥吉原，保々呂	2	6.5?	
M 1	烏帽子岩1号　　(No.48)	和気町大中山広谷 備前市西片上	1?	1.6?	
N	(No.17)	熊山町奥吉原，保々呂	?	?	△
	(No.38)	熊山町勢力，内御浦	1	?	△
	(No.47)	和気町大中山，観音谷	?	?	△
O 1	千躰行人山　　(No.14)	熊山町千躰，　瀧尾	2	2.1	
O 2	千躰明人山　　(No.15)	熊山町千躰，　向山	?	?	
O 3	坂根竜神様　　(No.25)	備前市坂根，　川合	?	?	
O 4	香登宮山　　(No.26)	備前市香登，　城山	1	4.9	
	(No.31)	備前市大内，南小路	2?	?	△
	(No.30)	備前市大内，香登寺跡	2?	?	△
	(No.34)	〃　　〃	2?	?	△
	(No.10)	瀬戸町弓削，　笹原			×
	(No.19)	備前市香登，　奥谷			×
	(No.24)	〃　伊部，　奥山			×
	(No.35)	〃　大内，　鬼ケ城			×
参考①	大廻山遺構　　(他小遺構5)	岡山市草ケ部	3?	10m×　? 6m×4m	
参考②	珠千壇地区　　(計　2)	備前市・和気町大中山			

【付　記】

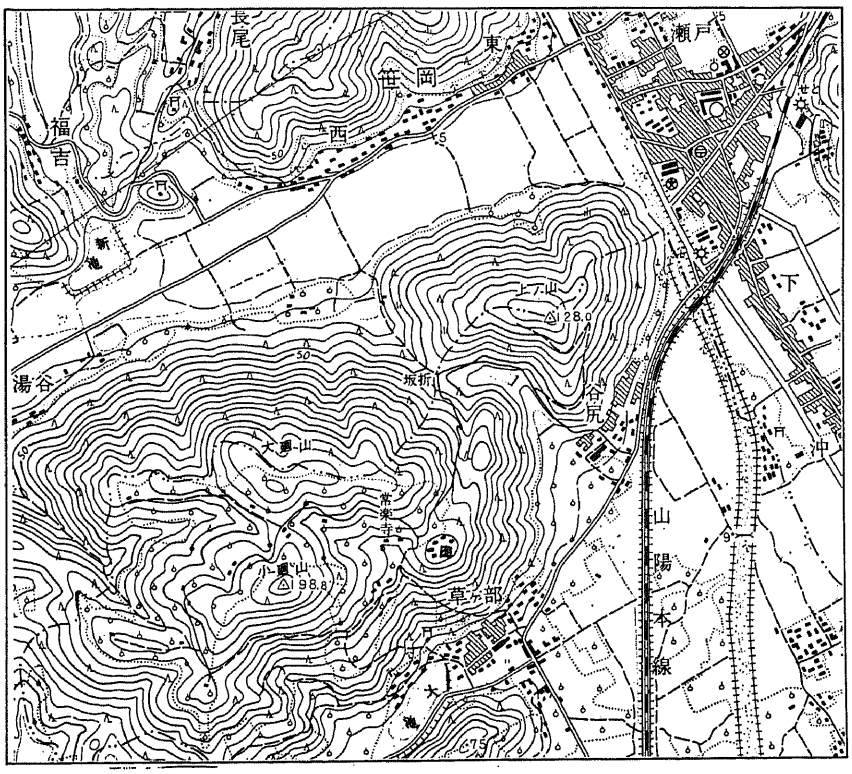
以上調査した熊山山塊の周辺にも，関連する石積遺構ではないかと見られるものが若干存在する。つぎにその概要を述べる。

1. 大廻山地区（岡山市と瀬戸町の境）

熊山山塊西端裾にもっとも近い山陽本線の駅は万富駅であるが，ここから西へ行ったつぎの駅は瀬戸である。瀬戸駅から南西方向約２㎞付近を頂とする山が大廻山である。

この大廻山が南東へ張り出した尾根，つまり草ケ部部落の北側の，標高約 140mの丘上に，もと３段を思わせる石積みがある。地元の旧家・井上家の所蔵する江戸時代の古地図に，経塚と記されているものであり，荒木誠一が「改修赤磐郡誌」にも略記しているところである。熊山山塊の石積遺構にくらべ，石材のほか土の量がかなり多いようである。かなり石材を失い，また転落しているものも多いので，原形復元は困難ではあるが，３段の各一辺の長さを推定すると，下から10m，６ｍ，４ｍとなる。

なだらかなこの小丘上には，これ以外にも石積の崩壊と考えられる墳状の石群５が存在しており，落葉・腐植におおわれている。この丘からは東方熊山山塊を望見することができる。



1：25,000

500m　0　500　1000　1500

第25図　大廻山地区石積分布地

2.珠千壇地区（備前市と和気町大中山の境）

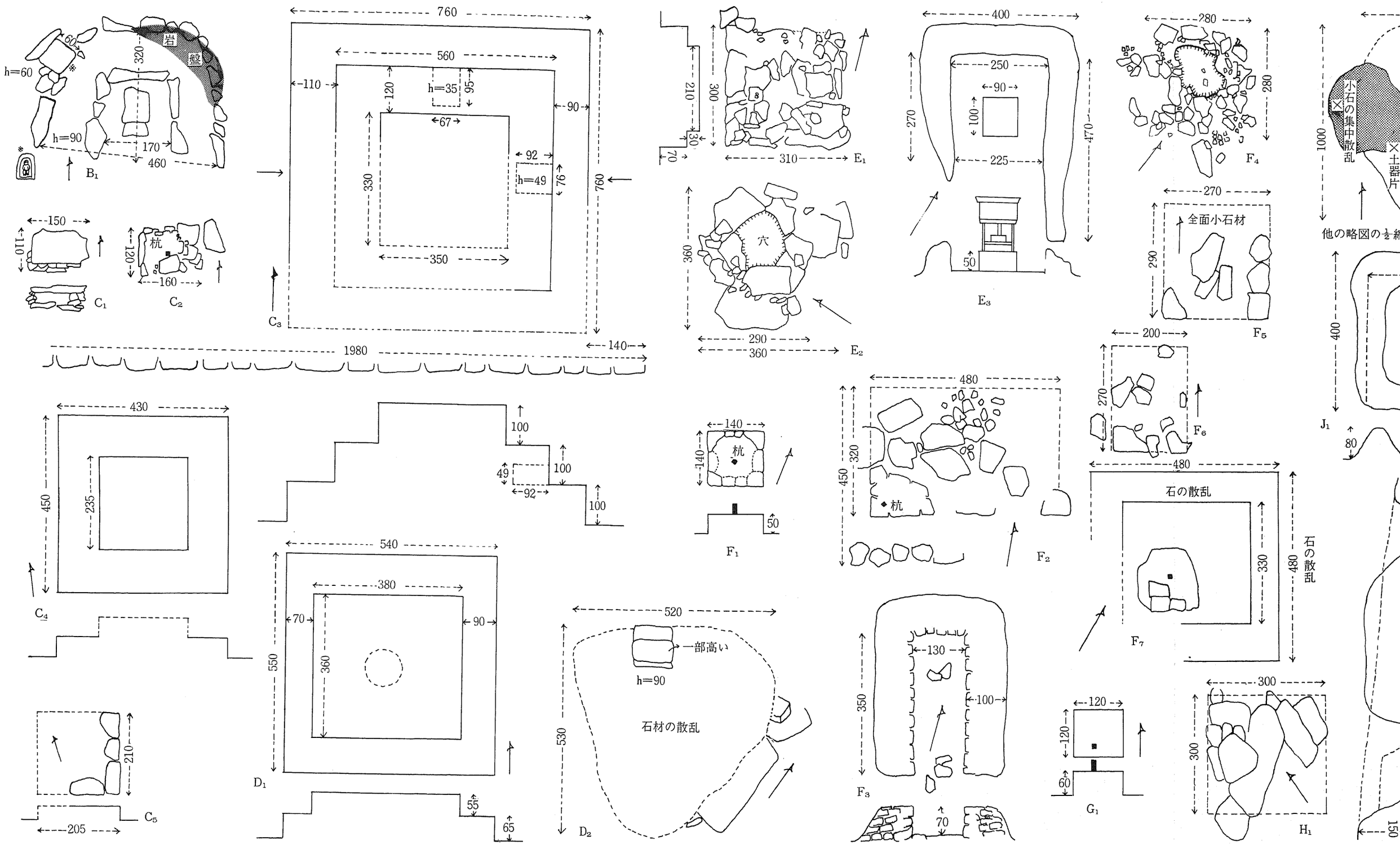
熊山山塊の東麓は，北半が和気町大中山，南半が備前市に属しているが，大中山の東，宿瀬池の谷を東北東に登りつめ，吉永町との境界を南へ登りきると 300.8mの三角点がある。そのやや南尾根上に，かつての石積遺構ではなかろうかと思われる石材の残存が見られる。地表すれすれに見える岩盤上に，若干の積み石があり，中央は空洞部を作っていたようである。全体の形状は破壊のため不明であり，付近に石の散乱が見られる。

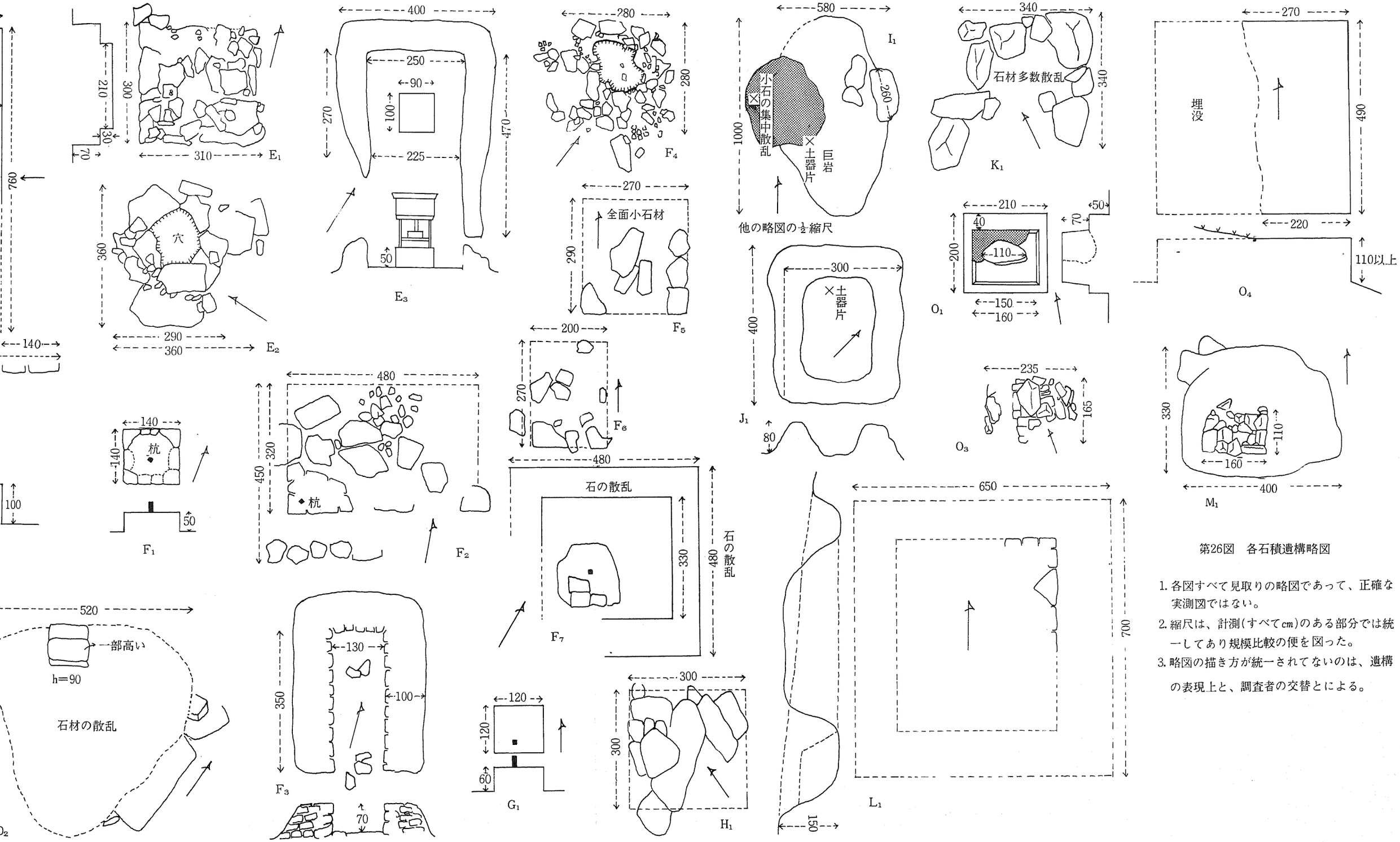
ここから尾根をさらに南へ下った地点，山道の東側にも，岩盤上に多くの小石材が，東西約４ｍ，南北約６ｍにわたって集中的に崩れ重なっている。段数・規模は不明であるが，石積遺構の可能性が強い。

この両遺構の立地する地点は，立木さえなければ西方に熊山連山を望見することができる位置である。

以上２地区について，８基ほどの存在を記したわけであるが，たまたま記録のあったものや，地元研究者の知見によったもので，他にも存在する可能性を指摘しておきたい。

（文責・角田　　茂）


B1
C1
C2
C3
C4
C5
D1
D2
E1
E2
E3
F1
F2
F3
F4
F5
F6
F7
G1
H1
J1
岩盤
杭
穴
全面小石材
石の散乱
一部高い
小石の集中散乱
土器片
他の略図の½縮
h=60
h=90
h=35
h=49
760
560
110
120
95
90
67
92
76
330
350
1980
140
430
450
235
100
49
540
380
70
550
360
520
530
55
65
205
210
150
170
460
320
60
400
250
225
270
470
50
280
290
200
480
130
300
120
60
80
1000
400
150



第26図　各石積遺構略図

1. 各図すべて見取りの略図であって、正確な実測図ではない。
2. 縮尺は、計測(すべてcm)のある部分では統一してあり規模比較の便を図った。
3. 略図の描き方が統一されてないのは、遺構の表現上と、調査者の交替とによる。

第六章　ま　と　め

熊山遺跡は，西面上部石積が一部崩壊したので，これを修理し，環境整備することとなったが，この事業に先立って，精密な実測図を作製すること，石積遺構東側焼瓦出土地点および，鐘楼跡と称される遺構の実体を究明すること，類似石積遺構の分布調査を実施することが，文化庁の指導によって計画された。

このため，熊山町教育委員会が，熊山遺跡緊急発掘調査委員会を組織し，昭和48年９月13日に第１回の委員会を開いて実施案を検討し，49年１月までの５ケ月を費してその事業をおこなった。その成果は次のとおりである。

Ⅰ　石積遺構の実測

国指定石積遺構付近を西端とする，一帯東西80m，南北50m，約4000㎡を平板測量で測った。石積遺構については，東西南北各面で36ケ所からのステレオ写真（計45モデル）を撮影した。写真縮尺は40～100分の１である。これにより，平面図１面，測面図各面計４面，断面図東西および南北各１面計２面の，合計７面の1/20の図化を実施した。その精度は，実寸で図面上±１㎜の範囲内で，とくに側面図は複雑な石積の細部まで正確に実測することができた。ただ各側面の龕内両側面および奥壁は，影の部分で不能のため，別途実測して側面図にはめこんでいるのは，写真測量の制約上やむをえないものであった。

熊山遺跡の実態については，かつては簡単な見取図しかなかったが，昭和25年７月，梅原末治博士が計測され，平面図と，東西・南北２方向の断面図を作製され，「吉備考古」86号に発表されたものが，学術的な紹介の初めであった。長年それ以外に拠るべきものがなかったが，昨48年，近江昌司氏が天理大学学報第85輯に発表された「備前熊山仏教遺跡考」は，東面の側面図を加えておられる。いずれにせよ，今回はじめて，熊山遺跡の精密な現状実測図が完成したものであり，今後の研究と，保存の原点が確立したと言いうる。

実測図完成後日時がないので，今後の検討にまたねばならない点ばかりであるが，２，３気づいた点のみを報告しておきたい。

１．最下段は，29.7㎝を１尺とすればほぼ天平尺の40尺の壇を形成する。ただし，それ以外の数値は天平尺では適当な数値にはならないので，簡単に天平尺とはいいきれない。

２．南辺と北辺は平行している。

３．最下段は平行四辺形であるが，３段目と４段目は台形になっている。これらの変形は築成時の誤差で，３段目と４段目の東南隅の角度は88°45′である。

４．龕の南北面は基準面と直交し，東西面のそれは各辺に直交するが，各辺が振っているので，南北方向とは１°15′偏っている。

5．3段目のテラスの幅はすべて龕の奥行と一致している。

以上の結果が，どのような技法によってもたらされたものかは，今後究明すべき課題であろう。

Ⅱ　石積遺構東側の発掘調査

石積遺構は岩盤の上に築成されているが，その東の平坦面から焼瓦が出土したり，「鐘楼跡」と称する礎石，およびこれに関連するかのような石列が見られる。この東部遺構の性格を究明するために，十文字にトレンチを入れて調査した。

その結果，平安時代末ごろまでは，石積遺構の東側岩盤は東に下がり，「鐘楼跡」東方付近との間に浅い窪地があって，この部分はほぼ露出していた。ただ石積遺構に対して何らかの宗教儀法が行なわれたためか，木炭などが検出され，若干の時代限定ができる小さな土器が混入していた。

鎌倉時代末ないし南北朝時代になって，この付近に瓦葺の建物が建てられ，これが火災にあってこの谷を埋める大きな要因となったようで，格子の叩目のある平瓦からは，鎌倉時代的様相がうかがえるが，菊花を中央に配した唐草文軒平瓦は，むしろ南北朝に下げて考えるべきものの ようである。しかしその時代判定は，出土瓦全般，および吉備地方の当代の瓦の，編年的研究の進展をまつべきであろう。

この瓦葺建物の元の位置・規模については，今後の調査にまたねばならないが，総社市井山宝福寺に，これと関係があると考えられる鐘が残っている。

「奉鐘鑄
　備州熊山靈山寺　大工左衛門尉
　應仁貳年成十一月十五日
　　新田庄内寺見村
　　大壇那祐長」

と5行の銘文が刻まれているが，これが瓦葺建物の存続の下限を示す，一つの例証となるであろう。

この寺が烏有に帰した後に，相当規模の整地が行なわれて，ほぼ現在見られるような姿になったようであるが，この時代については今のところ明らかでない。ただ，「鐘楼跡」の2まわりの方形石列のうち，北西寄りにずれる小さい石のものは，敗戦直後の時期に，石積遺構に対する遥拝所を作るためのものであったことが判明している。南東寄りにずれる，より大きい石の列はそれよりも古く，何の目的のものかはわからないが，霊仙寺鐘楼とするには確証があまりにも少ないようである。ただこの整地された地域の，石段を伴う石垣は相当大規模なもので，その性格は今後の調査にまたねばならないが，当初予想したように霊仙寺そのものとも，簡単には結びつけられないようである。

Ⅲ　分布調査

史跡に指定されている石積遺構と同様のものが，熊山一帯に分布することは，第五章に記載されているとおり早くから知られているが，石積遺構の性格を明らかにする上で，この分布および類似遺構の状況把握は最も重要であると判断され，全力を挙げて実施した。その結果，熊山山塊において，国指定石積以外に，石

積遺構およびその残がいと考えられるもの44ケ所を記録した。そのうち，境界石らしいものなど疑問のある12ケ所を差引いても32ケ所，国指定石積を加えて33ケ所が登録されることになった。

このうち25ケ所は山上西半部に集中しており，東半部はわずかに4ケ所，低位のもの4ケ所である。

最下段一辺長5mをこえるものが6基あって，うちC_3は3段築成で龕もあり，国指定のものとほぼ同規模のものであることが明らかとなった。このことは熊山遺跡の性格究明上，きわめて重要な問題をなげかけることになるであろう。その他のうち，小規模のものの性格究明も，今後の調査にまたねばならないであろう。分布調査に関連して付言しなければならないのは，本年にはいって，岡山市教育委員会の遺跡分布調査によって，同市草ケ部，常楽寺の東の墓地で同様の石積遺構が発見されたことである。これまで，熊山以外の地域にこのような石積遺構はないとされていたことにかんがみ，今後，より精密な調査が，この地域一帯の同種遺跡に実施され，その実態が明らかになることが期待される。

（坪井清足）

付　参考文献目録

1. 史　料

(1)大亮軒『和気絹』　佛閣

帝釈山霊山寺。熊山にあり。本尊堂観音堂の跡あり。戒壇院の跡あり。高六間広四間四方開基は唐僧鑑真和尚といへり。いにしへの兵火の後，取立る人なし。（以下略＝筆者）

『吉備群書集成』㈠P25。宝永六年（1709）

(2)松本亮『東備郡村志』　和気郷　奥吉原村。

霊山寺戒光院と云ふ刹あり。これを熊山寺と称す。天平宝字年中唐の鑑真和尚の開基也。古は尤も大寺なりしが，建武の乱に堂塔焼亡す。此寺に戒壇三處あり。昔は五つあり由。国中の諸寺戒壇ある處更になし。これを以て按に，當国の国分尼寺なるべきか。法皇外記に，宝字四年孝謙天皇詔あって，天下国分寺に戒壇を築かしむと云う。

『吉備群書集成』㈡　P．361　元文二年（1737）

2. 当遺跡について直接論考を加えた文献

(1)沼田頼輔「備前熊山戒壇遺跡考」

『考古学雑志』第15巻6号　大正14年（1925）-6月。

(2)永山卯三郎「史蹟，熊山戒壇に関する調査報告」

『岡山県通史』　PP 505～ 511　昭和5年（1930）11月。

(3)荒木誠一「附記，戒壇址」

『改修赤磐郡誌』　PP 414～ 418　昭和15年（1940）2月。

(4)梅原末治「古代施彩窯器の新資料」—備前熊山戒壇出土品其他—

『史跡と美術』 202号　昭和25年（1950）5月。

(5)梅原末治「備前熊山上の遺跡」

『吉備考古』第86号　昭和28年（1953）7月。

(6)大本琢壽「熊山雑記」

『吉備考古』第86号　昭和28年（1953）7月。

(7)大本琢壽「熊山雑記」其の二

『吉備考古』第87号　昭和28年（1953）12月。

(8)潮見定秋「熊山霊峰」

『熊山神社』　昭和42年（1967）5月。

(9)近江昌司「備前熊山仏教遺跡考」

『天理大学学報』第85輯　昭和48年（1973）3月。

(10)斉藤忠「奈良朝の仏教遺跡と酷似点」

『朝日新聞』　昭和48年（1973）5月7日。

3. 当遺跡を参考資料として紹介又は引用している文献

(1)私立和気郡教育会「帝釈山霊山寺」

『和気郡誌』P．517　明治42年（1909）5月。

(2)水野精一「さまざまなる造像」

『世界考古学大系』四　PP．106～107　昭和33年（1958）7月。

(3)小林行雄「くまやま―いせき」

『図解考古学辞典』　PP．281～282　昭和34年（1959）6月。

(4)岡山県「神社と寺院」

『岡山県の歴史』　PP．111～112　昭和37年（1962）11月。

(5)大本琢寿「熊山戒壇址」

『日本考古学辞典』P．156　昭和37年（1962）12月。

(6)藤井直正「勝尾寺の牓示」

『箕面市史』第1巻　PP．434～488　昭和39年（1964）12月。

(7)石田茂作「佛塔の変遷」

『佛教史学』第12巻第1号　P．5　昭和40年（1965）2月。

(8)石田茂作「段塔」

『日本佛塔』　P．155　994図　昭和44年（1969）3月。

(9)間壁忠彦・間壁葭子「熊山」

『岡山の遺蹟めぐり』PP.74～75　昭和45年（1970）6月。

(10)福山敏男「戒壇と土塔」

『新版考古学講座』八　P.98　昭和46年（1971）5月。

(11)石田茂作「熊山戒壇」

『日本の美術』10　P．3，P.81，P.85　昭和47年（1972）10月。

(12)小倉豊文「香登から熊山・万富」

『山陽文化財散歩』　PP.32～33　昭和48年（1973）2月。

(13)長光徳和「熊山戒壇遺蹟」

『岡山の宗教』　PP.39～41　昭和48年（1973）3月。

(14)正岡睦夫「熊山遺跡群」

『熊山町遺跡地図』　P.12　昭和48年（1973）4月。

(15)熊山町誌編さん委員会「熊山遺跡」

『熊山町誌』　PP．154～158　昭和48年（1973）10月。

（収録・難波俊成）

(1)「熊山遺跡」石積遺構　東から

(2)「熊山遺跡」石積遺構　南から

図版第2

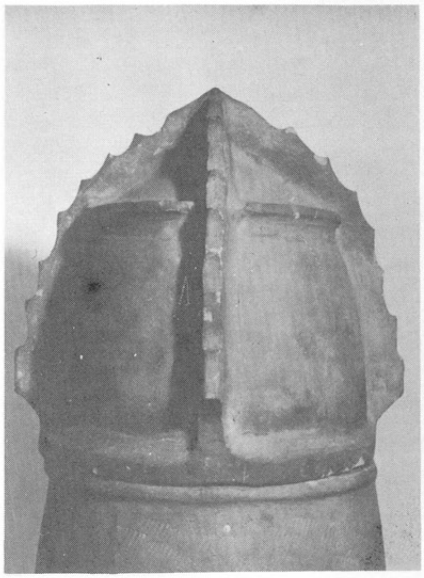
(1) 国指定石積遺構龕　東から

(2) 国指定石積遺構龕　南から

(1) 国指定石積遺構龕　西から

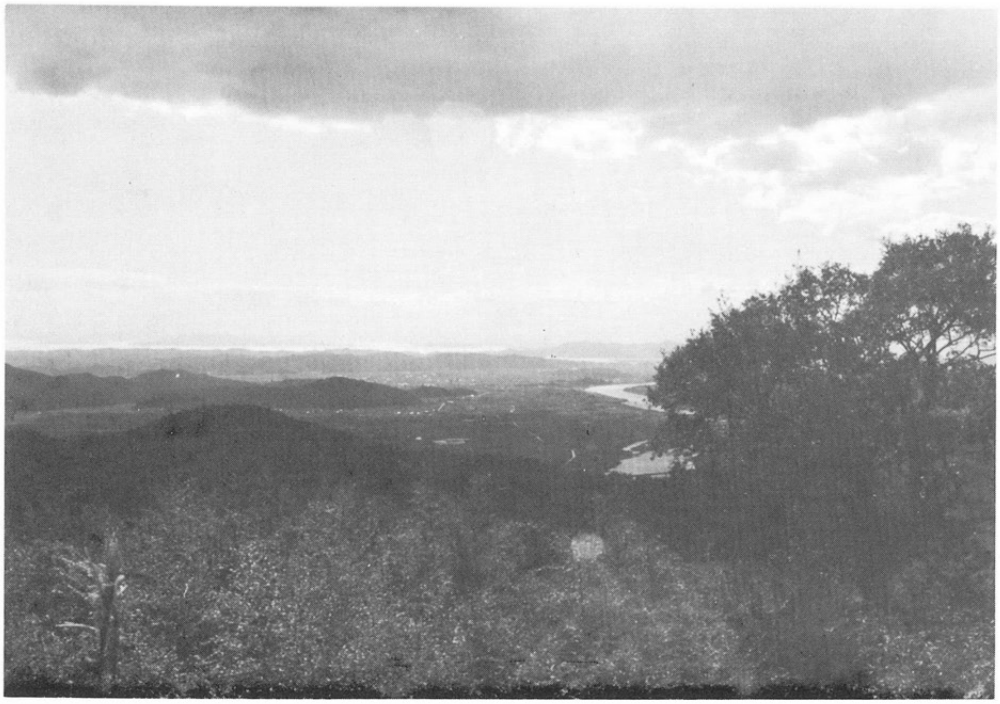
(2) 国指定石積遺構龕　北から

(1) 国指定石積遺構出土　陶製筒形容器



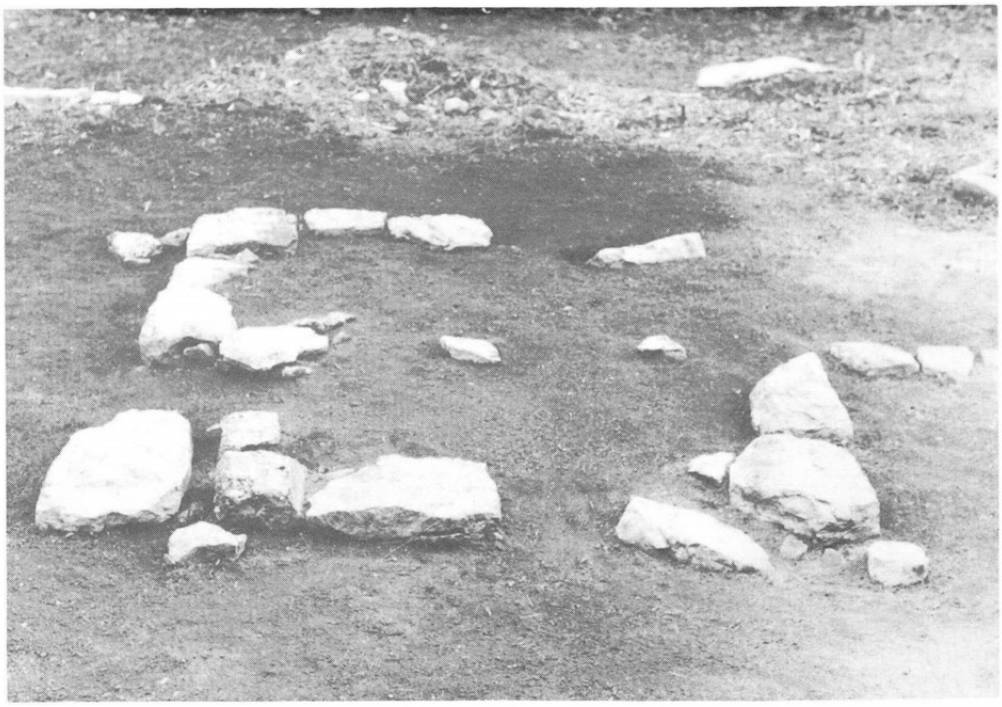
(2) 陶製筒形容器蓋（部分）

(1) 熊山遠景



(2) 熊山遺跡からの遠望（南方）

図版第6



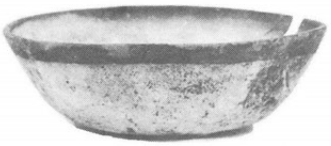
(1) 鐘楼跡石列

(2) 発掘区全景

(1) Aトレンチ W－2区・平瓦出土状況

(2) 史跡内　墳状遺構

図版第8



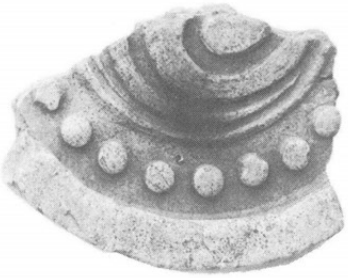
1

6

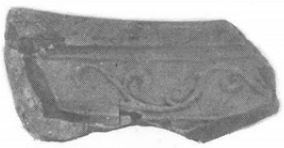
2

7

8



3



9

4

10

5

11

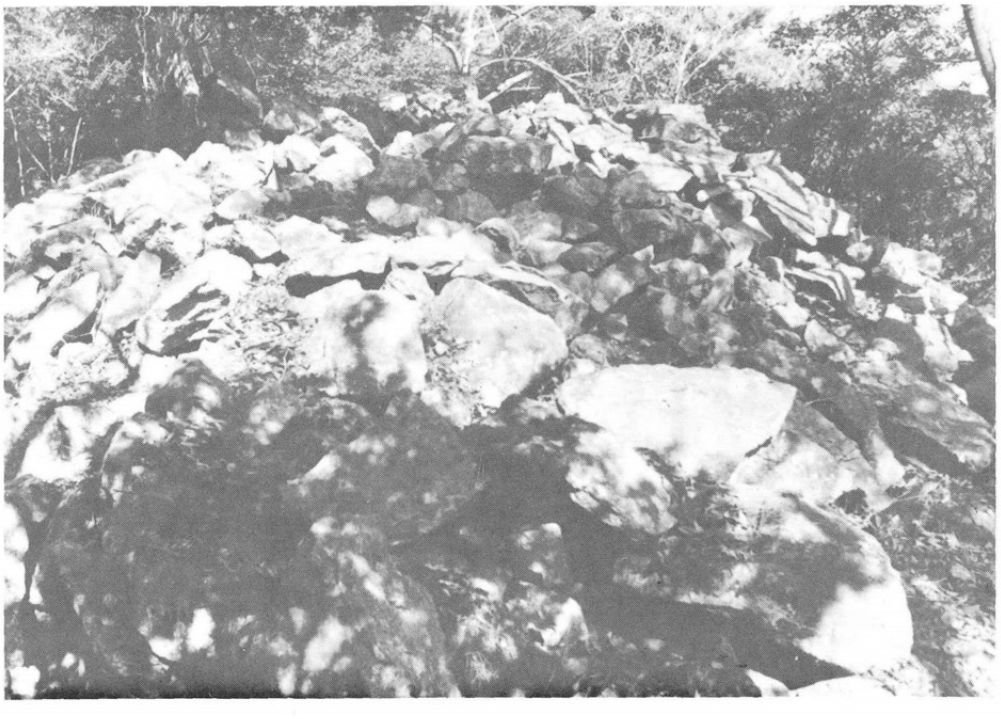
出土瓦

(1) 竜神山1号　（行者様）石積遺構（B_1）

(2) 南山崖1号石積遺構（C_1）

図版第10

(1) 南山崖２号石積遺構（C_2）



(2) 南山崖３号石積遺構（C_3）

(1)　南山崖３号石積遺構（C_3）

(2)　南山崖３号石積遺構 竈

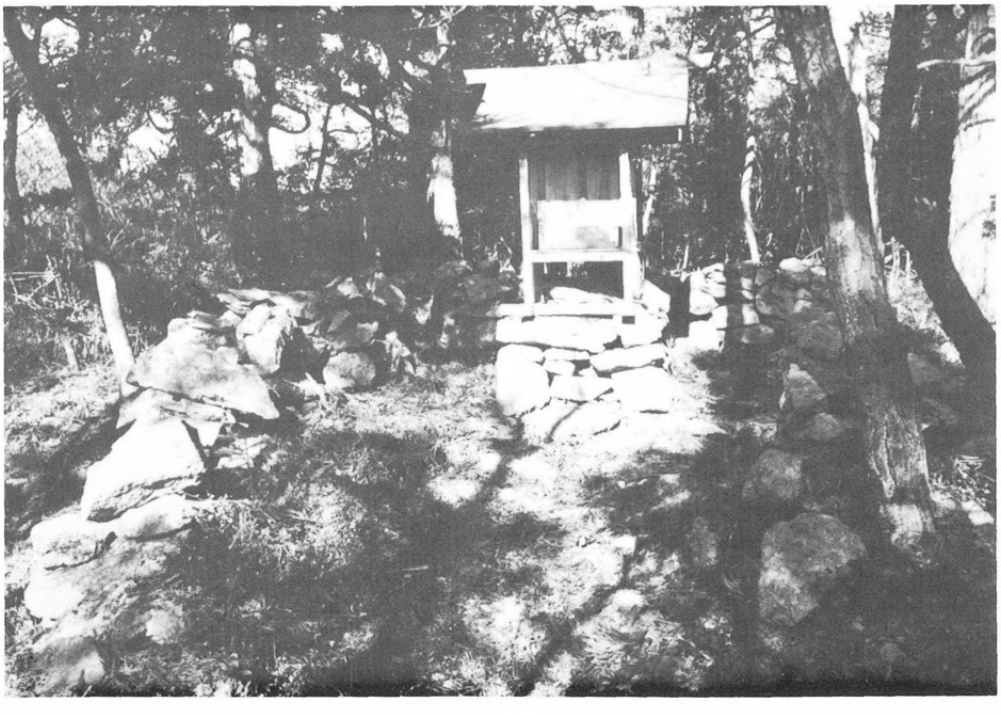
(1)　南山崖４号石積遺構（C_4）

(2)　南山崖５号石積遺構（C_5）

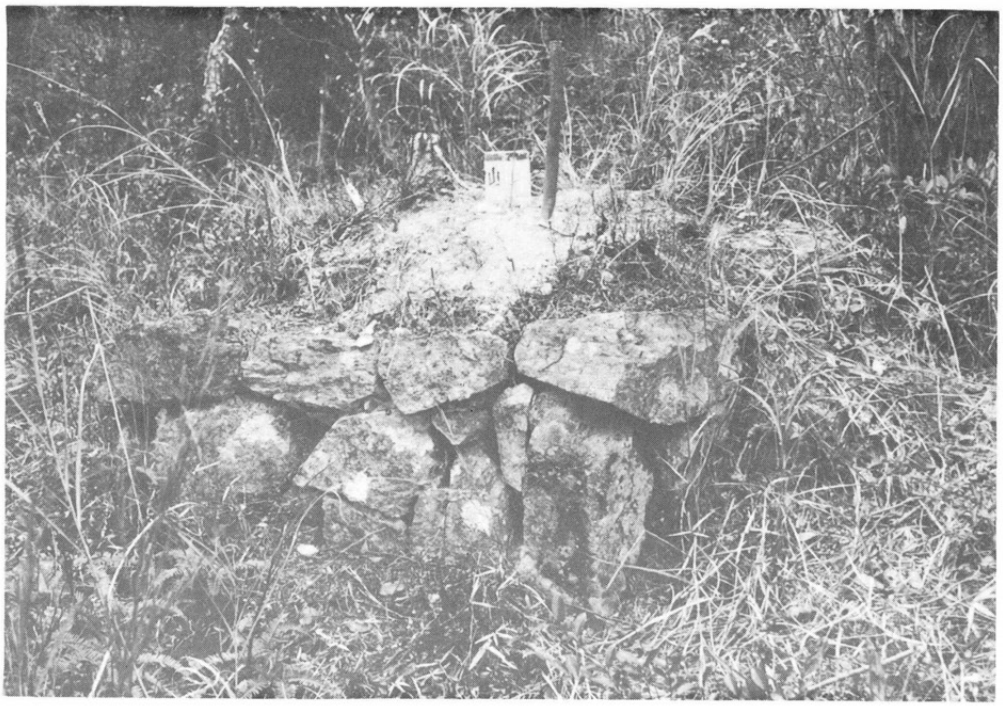
(1) 経盛山１号石積遺構（D_1）

(2) 風神山１号石積遺構（E_1）

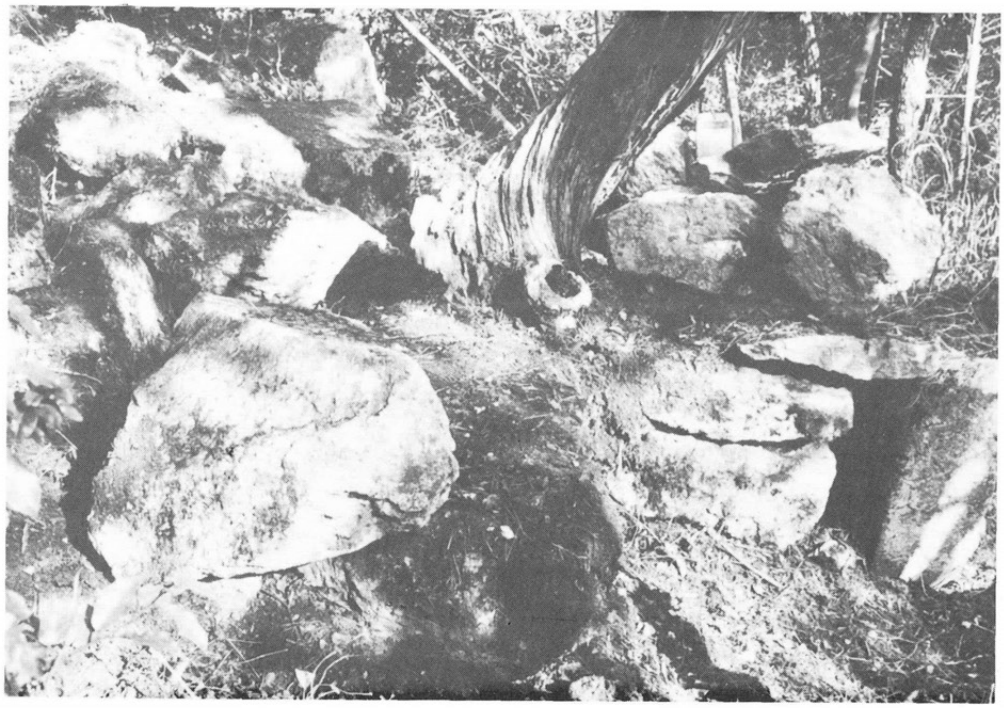
(1) 風神山２号石積遺構（E_2）



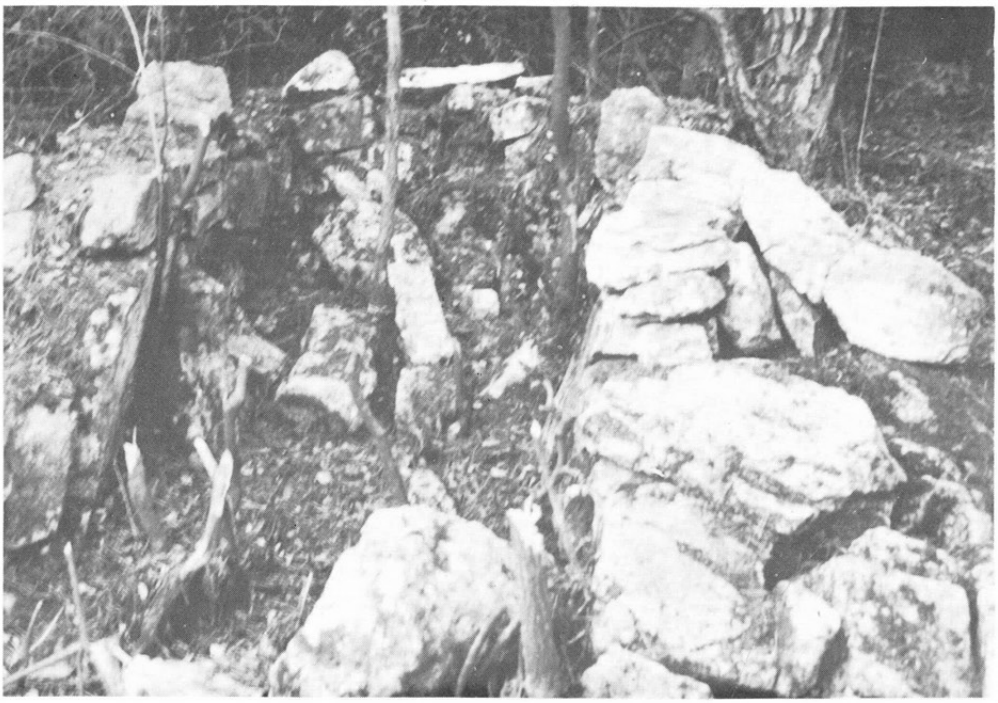
(2) 風神山３号　（鍛冶神様）　石積遺構（E_3）



(1)　南の峰１号石積遺構（F_1）



(2)　南の峰２号石積遺構（F_2）

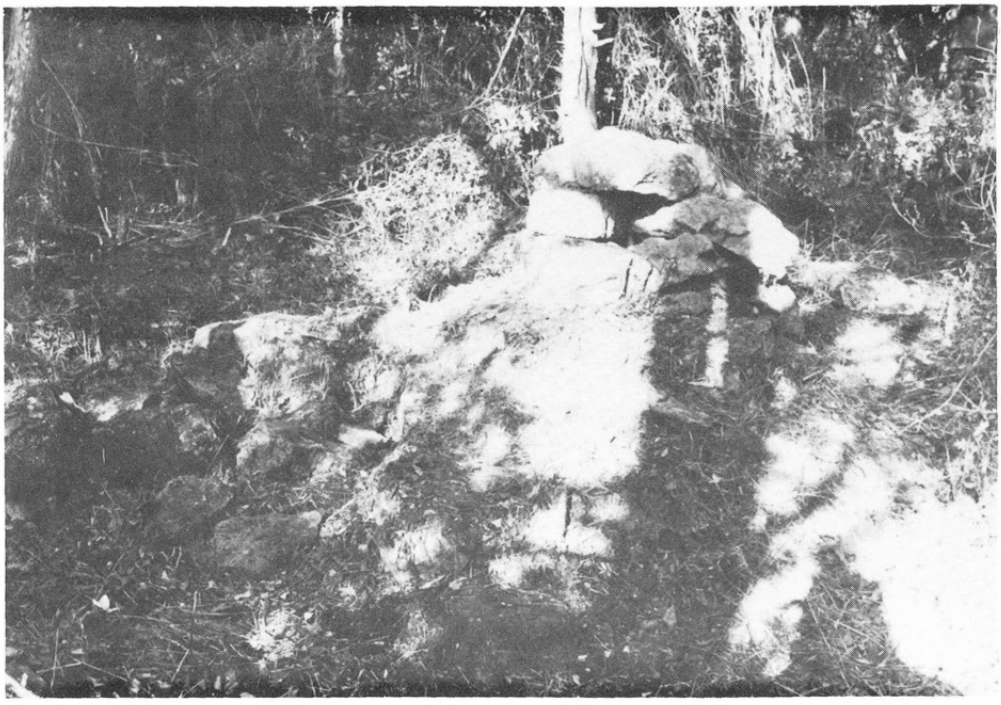


(1)　南の峰３号石積遺構（F_3）

(2)　南の峰４号石積遺構（F_4）

(1)　南の峰５号石積遺構（F_5）

(2)　南の峰７号　（美音院跡）石積遺構（F_7）



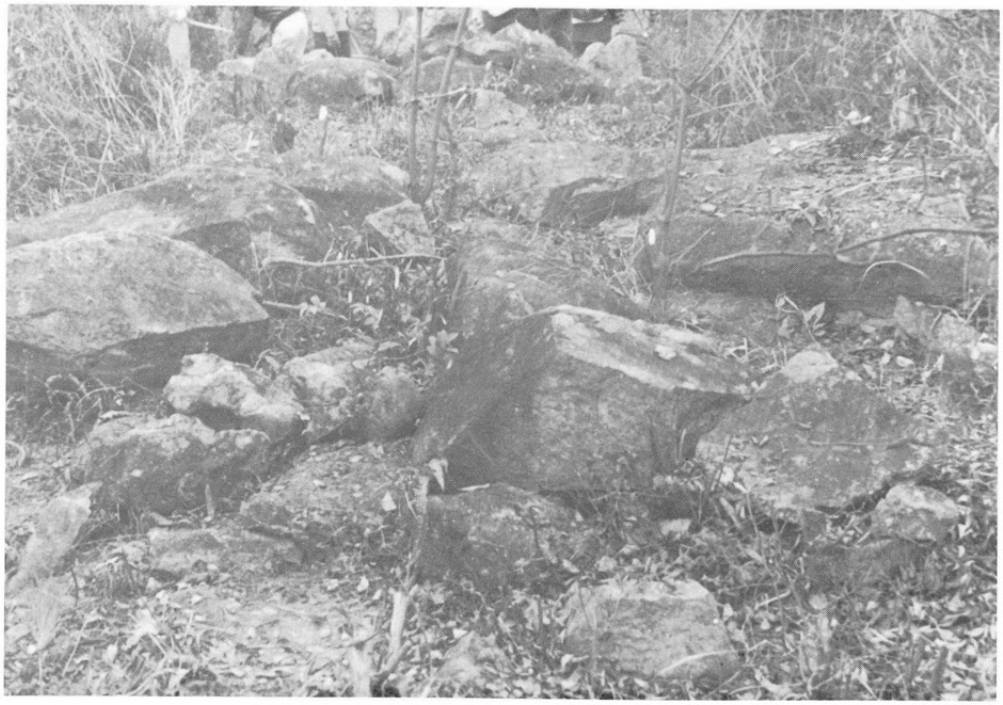
(1)　南の峰８号石積遺構（F_8）

(2)　大谷山１号石積遺構（G_1）

(1)　高津山南１号石積遺構（H_1）

(2)　山頂三角点１号石積遺構（I_1）

(1) 尺八山１号　（院の墓）石積遺構（J_1）

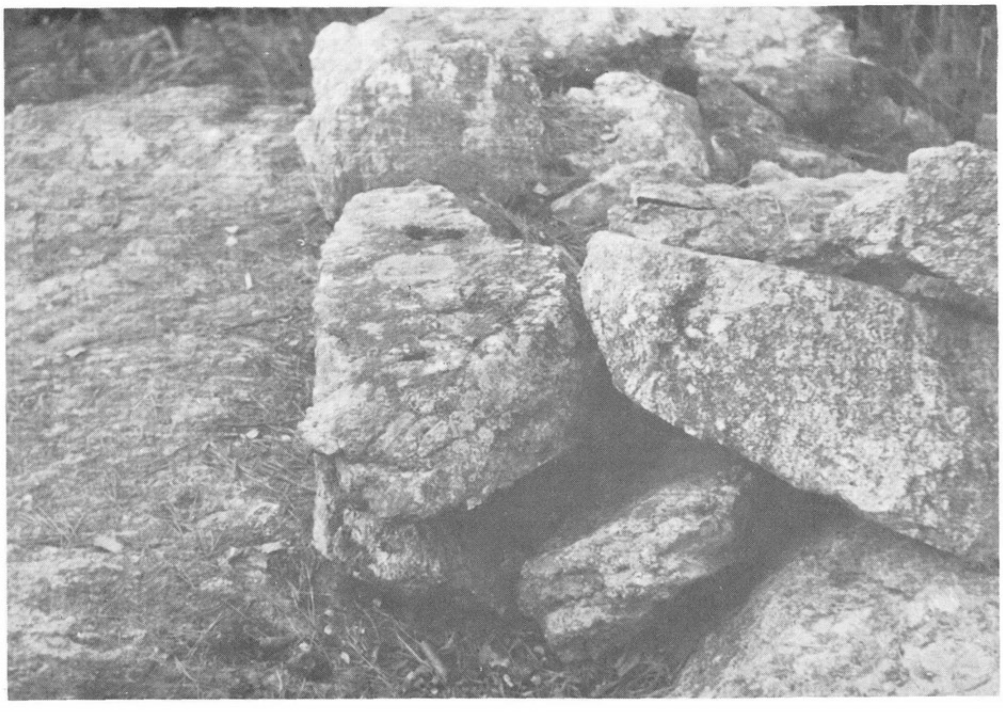


(2) 獅子ガ谷１号石積遺構（K_1）

(1) 獅子ガ谷２号石積遺構（K_2）

(2) 舟下山１号　（犬の墓）石積遺構（L_1）

図版第22

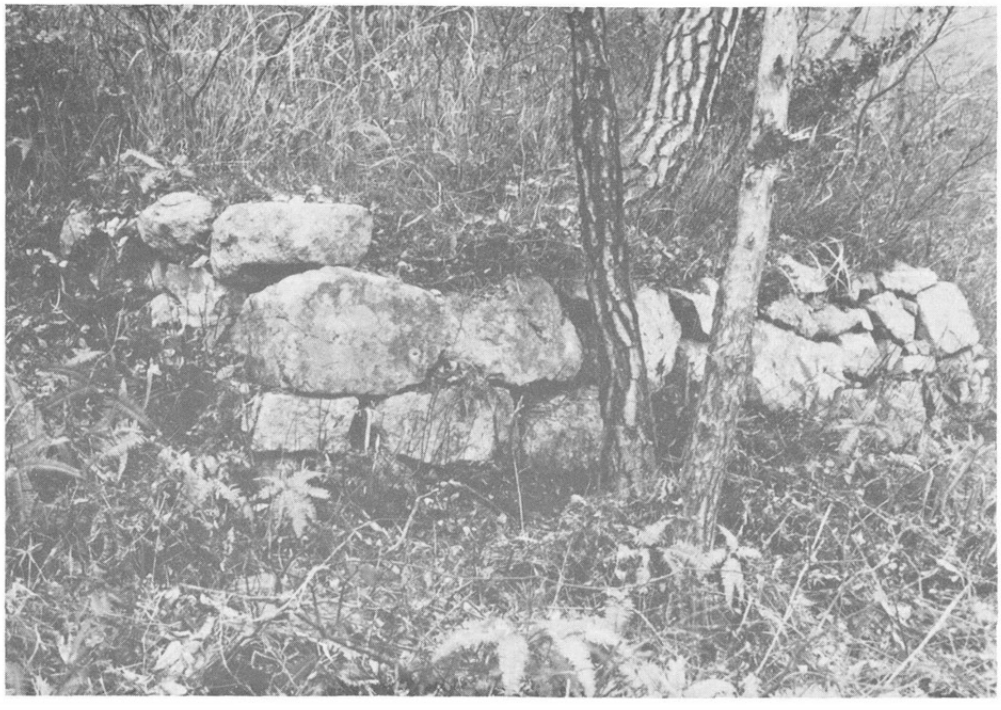


(1)　烏帽子岩１号石積遺構（M_1）

(2)　千躰行人山石積遺構（O_1）

(1) 千躰明人山石積遺構（O_2）

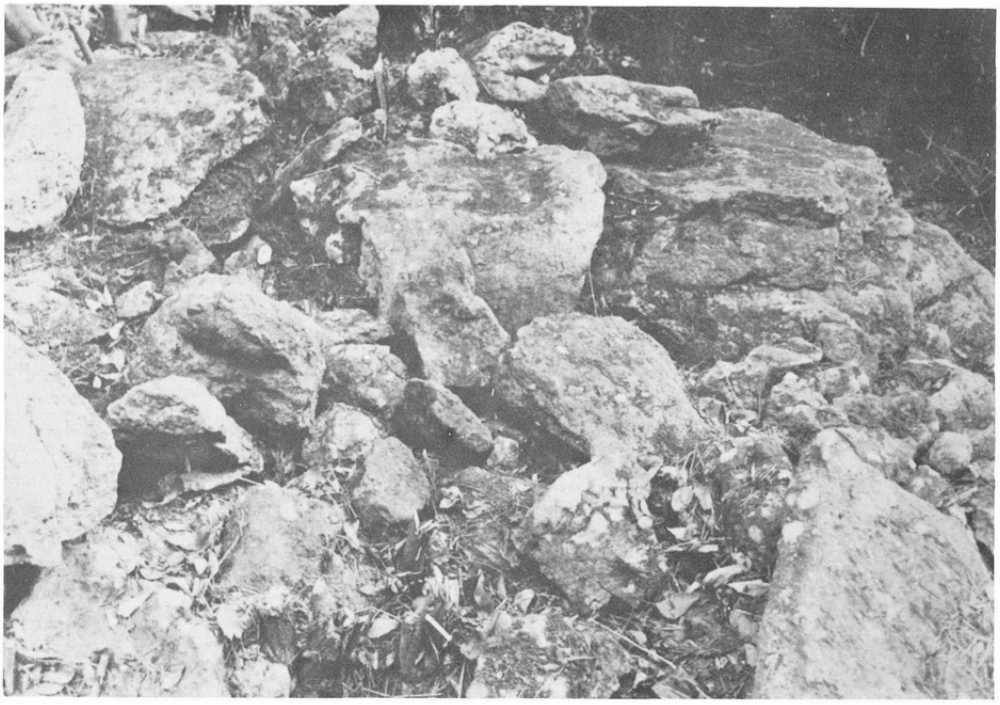
(2) 坂根竜神様石積遺構（O_3）



(1) 香登宮山石積遺構（O_4）

(2) 熊山町勢力雲上山石積（参考No38）

(1) 珠千壇石積遺跡（和気町大中山）



(2) 珠千壇石積遺跡（備前市片上）

あ と が き

このたびの「熊山遺跡」の調査は，熊山町にとって画期的なものであった。

すなわち，各地において土地開発に伴なう発掘調査が進行している最中に「熊山遺跡」石積の復旧修理保存のための調査を実施するということは，人的，物的にも，日数の上でも相当困難なものであった。

調査の実施にあたっては，遺跡が標高500m前後の山上に存在すること，石積遺構分布が熊山町のほか備前市・瀬戸町・和気町の１市３町にまたがることなど問題点は多かったが関係各位の献身的なご理解とご協力とによって貴重な成果をあげ調査を終了したことは誠に感激に耐えない次第である。

国指定の石積は，復旧修理されることが確約されているが，問題は多い。

分布調査の結果，各地の石積遺構は予想以上の数が発見されたが，ほとんど崩壊しており早急に保護保存の必要が痛感される。

今後この道の各位によりその究明を期待し，その保存管理の万全を期したい。

なお末尾になったが，本報告書作成までに精力的かつ献身的な作業を進めていただいた角田茂氏・難波俊成氏・正岡睦夫氏・真野義一氏に敬意を表するしだいである。

１９７４年３月

熊山町教育委員会

教育長　吉　原　貞　郎

第27図

熊山の地形および石積遺構分布

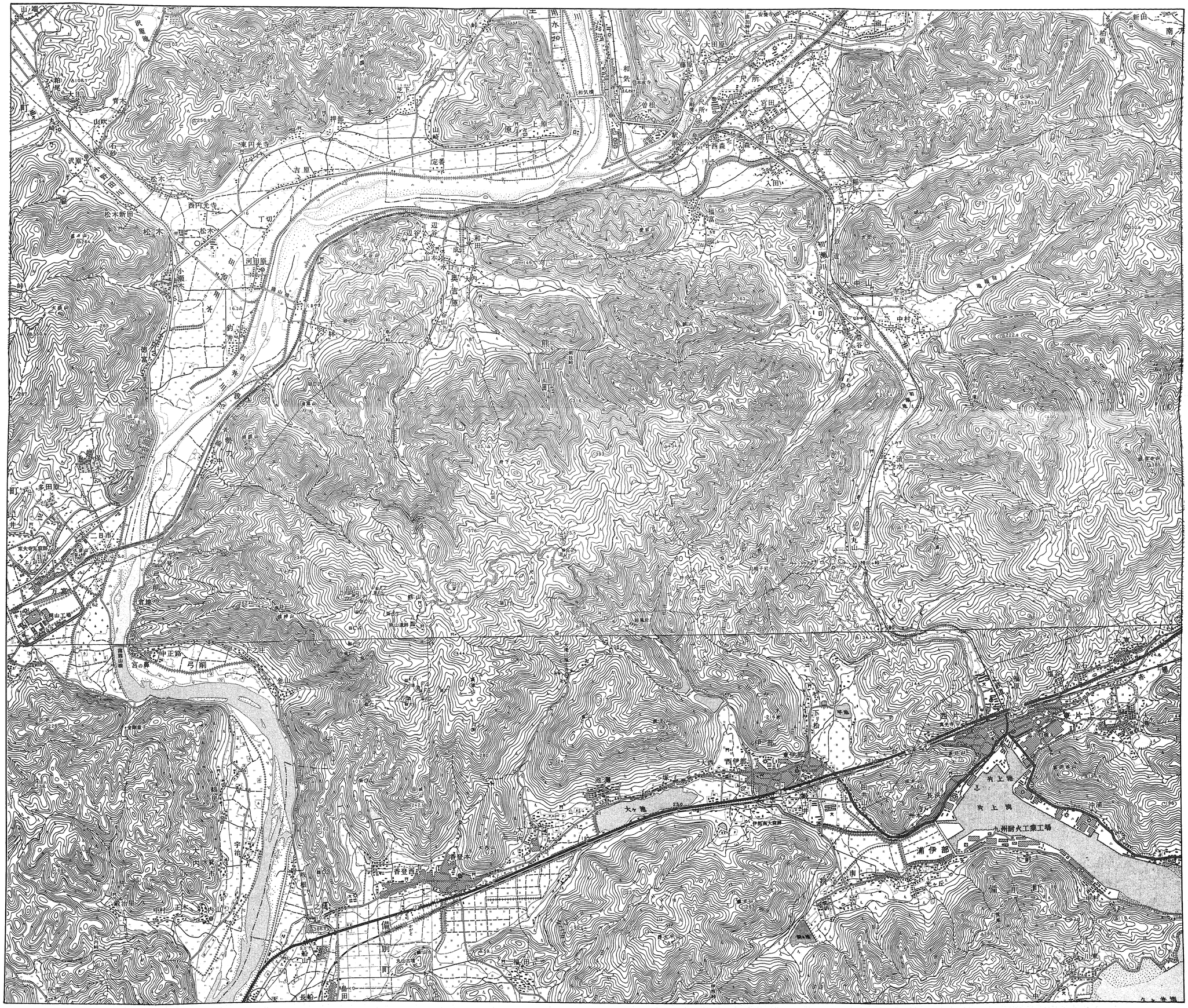
凡　例

- ▨ 確実またはほぼ確実な石積遺構
- □ 石積かとも思われる参考地
- …… 350m等高線

1：25,000

500m　0　500　1000　1500

（この地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭49中複，第14号）



熊山遺跡緊急調査概報

昭和49年3月31日発行

発行　熊山町教育委員会
岡山県赤磐郡熊山町松木517

印刷　(有)久崎印刷
岡山県和気郡和気町和気818